

ロバート・バートン 『憂鬱の解剖』

第1部 第3章 第1節 第3・4項 - 第3節、第4章

岡村 眞紀子
川島 伸博 訳

第3章 第1節 第3項

星辰の影響、身体の部位、体液に起因する各種症状。

星辰の影響から生じる気質と局面に応じて特有の症状をみせる人もいて、この影響によって、思考力が鋭くなったり、鈍くなったり、さまざまな性格が決まる。アントニオ・ザラが論じるように、「星辰の影響は多くの人を突き動かし、そこから憂鬱な魂と病んだ身体が生じる」(『気質と知性の解剖』1. 11-14)。ベルンハルディ曰く、星辰の影響から心身のさまざまな病が生じる。プトレマイオス、ポンターノ、レメンズ、カルダーノ等を典拠にすでに証明したように、星々が相互的に影響を与え合うことで、人の性格を決定し、病気を惹き起こす主要因となるからである。すなわち、星辰は人の生誕を司るのである。『百言集』におけるプトレマイオス、また、かの論攷におけるヘルメス・トリスメギストスは(作者の真偽はともかく)、憂鬱症に見られるあらゆる症状を、星辰の影響に帰す。この見解をメルクリアーレは否定するが(「頭部の感染について」1. 10)、すでに見たように、ジョヴァンニ・ポンターノ等は強固に支持している。たとえば、人付き合いが悪く、活気がなく、暗く、つむじ曲がりな人がいる一方、楽天的で、人付き合いがよく、明るく、陽気な人もいたりするが、こういった性格の違いも星辰に起因するとする。生誕時に土星が支配的だと気質が憂鬱になり、その人は極めて厳格、不機嫌、つむじ曲がりな性格となり、顔色は悪く、深く考え込み、心労や苦痛や不満が多く、悲しげで怯えていて、いつも無口で、孤独を好む。彼らは農作業をしたり、森や果樹園や庭園、川や池や、暗い散歩道や袋小路にいたりすると喜びを感じる。「考えているのは、小屋を建てたり、木を植えたり、土地を耕したり」、鳥や魚を捕まえたりすること。彼らは、つねにそういったことに思いを馳せ、そんなことばかり考えている。木星が支配的だと、より野心的になり、王国や統治のこと、役職や名誉のことばかり考え、自分のことを君主や統治者だと思い込んだり、出世のための方法などに思いを巡らしたりする。支配星が火星の場合、人は戦争や華々しい戦闘や果し合いのことばかり考え、短気で、怒りっぽく、思慮足らずで、向こう見ず、気性が激しく、行動に移ると暴力的な性格になる。勝利者や指揮官の体を装い、感情的で、話をするときには斜に構え、それでいて大の威張り屋で、赤

ら顔が特徴である。みすばらしい身なりで、貧しく卑しくとも、ホラティウスのテレポスとペレウスよろしく、

大言壮語を吐き、長口上をぶち、

まるで口の中に大勢の兵士がいて、舌先に指揮官が陣取っているかのよう。太陽が支配星の場合、少なくとも想像上は、領主や皇帝や君主になり、人々に役職や爵位を与える。金星の場合は、愛しい女性にいつも言い寄る。実際、彼らは恋愛に適し、その才能があり、音楽を聴いたり、演劇に行ったり、美術や舞踏や娯楽を鑑賞したりする。つねに恋していて、目に入る誰にでもものぼせあがる。水星の影響下に生まれる人は、孤独を好み、よく瞑想をし、繊細で、詩人や哲学者が多く、たいていは詩や哲学に思いを巡らせている。月の影響下にあると、大いに旅を愛し、誰もが遍歴や航海に向かい、そういった旅について話したり、本を読んだり、夢想したりする。あれこれと想像のうちに彷徨い、水を非常に好み、釣りや鳥猟などを楽しむ。

しかし、もっとも直接的に症状を生み出すのは、気質それ自体、それに頭部、肝臓、脾臓、腸間膜静脈、心臓、子宮、胃などの体内器官、そして特に、精気の不具合（エルコレ・サッソーニアの論では、精気は非物質的だが）、あるいはこれらの器官に存在する四体液である。四体液は、熱い冷たい、先天か後天、生来か外来、濃い薄い、単一か混合かにかかわらず、また、混ざり具合、焦げ具合、組み合わせ（クラウの指摘するように体液には冷・熱・乾・湿という四つのさまざまな基本性質があるので、組み合わせも同じくさまざまに変化する）に従い、数多くの症状——ワインで酔った人がするような馬鹿げた話——を生み出す。その数は、アンドレア・バッチ曰く、無数である（第3巻「酒について」20）。これらのうち特に重要なのは以下の通りである。

先天性憂鬱症の場合、ルイス・メルカド（1. 17. 「憂鬱症について」）とティモシ・ブライト（16）が詳細に記すように、脾臓か静脈のいずれかが、体液の量、あるいはその濃度に問題を抱え、体液が冷たく乾燥する。従って、ダ・モンテが『診察』26で断言するように、彼らは悲しげで臆病で怖がりな性格である。プロスペロ・カラーニ（『黒胆汁註解』）によると、「黒く冷たい胆汁が多い場合」、普通よりも愚かで、冷たく、重々しく、孤独で、無精である。またエルコレ・サッソーニア（16. 1）によると、「先天性憂鬱症の場合、顔色は鉛色か黒ずみ」、グアイネリオ（3. 15）も同意見で、症状が進むと、自分は死んでいると思うようになることが多く、しばしば悪魔や死人や霊や小鬼を目にしたり、そういったものと一緒に話したりする。これらの症状は、黒胆汁以外の焦げていない三つの体液の混合、あるいは焦げている四つの体液の混合——すなわち後天的憂鬱症——の度合いによって、さまざまに変化する。というのも、トラレスのアレクサンドロス（1. 16）が記しているように、「この憂鬱症を惹き起こす原因は一つではなく、それを生じる体液も一つではない。そうではなく、さまざまな体液がさまざまに混ざり合い、そこからさまざま

まな症状が生じる」のであり、さらにこの多様性は、体液の温度によっても変化する。ベネデット・ヴィットーリ（『診療大全』）曰く、「黒胆汁が冷たい場合、耄碌や比較的軽い症状を惹き起こすが、黒胆汁が熱く、焦げている場合、激しい感情や猛烈な症状の原因となる」。フラカストロ（『思惟について』巻2）は「憂鬱症の患者が見せるさまざまな症状について」、我々に熟慮を促す。「というのも、これを知っておけば、非常に有益だからである。熱く焦げた黒胆汁で苛立つ人もいれば、冷たい黒胆汁に取り憑かれ、悲しむ人もいる。怖がりや恥ずかしがりの人もいれば、恥知らずで大胆な人もいる」。たとえばアイアスのように、彼らは「怒り狂い、武器をとり、神々に戦いを挑ん」だりする。これは狂気の沙汰、少なくとも狂気の兆しであり、この類の人は「誰彼となく攻撃を加える」。またこれとは反対に、「気が狂い、野を独りさすらう」ペレロポンテスのように、彷徨い、絶望し、涙して、人生に倦む人もいる。あるいは笑い転げる人もいたりする。これらの多様性はすべて、熱と冷の度合いによって生じるのだが、エルコレ・サッソーニアによると、その度合いの違いはすべて、精気、特に動物精気など非物質的精気の不具合から生じる。サッソーニアはこれを憂鬱症の直接因とし、精気の熱、冷、乾、湿の度合いや、その混ざり具合によりさまざまな症状が生じると論じ、その著『憂鬱症研究』を通して、特に13章で、多様な症状を例示している。しかし、こういった多様性は、四体液の焦げ具合から生じるのだと論じる人が多い。後天性憂鬱症の場合、血液腐敗、胆汁の焦げ、先天的黒胆汁、「熱量の異常過剰が原因となり、体液の塩分が先天性黒胆汁より濃くなるので、その有り様に従い、さまざまな奇妙な症状を生じる」。ティモシ・ブライトはこのように論じ、さらに次の章で、より詳細に説明している。アルコールもこれと同意見で、四体液の焦げ具合と、その他の体液との関係によって、症状に多様性が生じるとする。

たとえば、憂鬱症が粘液から生じる場合（これは他の体液に比べると稀で、あまり頻繁には起こらないのだが）、鈍感の症状、ある種の愚鈍さを惹き起こし、怪我をしても気づかないことがある。サヴォナローラ曰く、彼らは眠たげで、鈍感であり、のろまで、不感症、木偶の坊であり、驢馬のようで、メラニヒトンはこれを「驢馬性憂鬱症」と呼ぶ。「彼らはよく泣き、湖や池、淀みや川など水辺を好み、釣りや鳥猟などを楽しむ」（アルナルドゥス『診療概略』1.18）。顔色は青白く、無精で、すぐ寝てしまい、活気がない。よく頭痛に悩まされ、つねに瞑想し、ぶつぶつ独り言を言う。よく水辺の夢を見るのだが、その中で溺れそうになって怯える（ラーゼス）。他の憂鬱症患者に比べると太っていて、顔色は土色、しばしば唾を吐き、すぐに寝てしまい、粘膜分泌物に悩まされることが多く、つねに地面を見つめている。エルコレ・サッソーニアが挙げるこの種の患者は、ヴェネチアの未亡人なのだが、太っていて、いつも寝ぼけていたというし、クリストバル・デ・ヴェガも同様の症状に苦しむ患者の例を挙げている。これが常習的で激しくなると、症状はより顕著となり、あきらかに耄碌し、身振りや言動のすべてが、傍から見ると滑稽になり、途方もないことを想像したりするようになる。クリストバル・デ・ヴェガの患者は、自分をワインの酒樽だと思っていたというし、デュ・ローランには、町中が水没してしまうのでは

ないかと恐れ、排尿しないことを決意するシエナ人の例が挙げられている。

憂鬱症が焦げた血液から生じる場合、あるいは黒胆汁に血液が混合している場合、「通例、顔色は赤らみ、血色がいい」（サルスティオ・サルヴィアーニ、エルコレ・サツソーニア）。さらにサヴォナローラとベネデット・ヴィットーリ（『診療大全』）は「彼らの目は充血していて、顔同様に赤い」と追記する。すぐに笑い、機転がきき、陽気で、会話も機知に富み、愉快で、症状が行き過ぎない限り、音楽や舞踏の才能を発揮し、女性との付き合い方も上手い。いつも、そういうことを考え、「演劇や舞踏やそういった遊戯を見たり、聴いたりしたが」、エルコレ・サツソーニアによると、彼らは恐怖や悲しみとは無縁である。ただアルナルドゥスが『診療概略』（1. 18）で追記するように、この類の憂鬱症も症状が重くなると、ホラティウスの詩に出てくるアルゴスの男のように、まるで劇場の中にいるかのごとく、一日中座って、笑い続けたりする。アリストテレスもこれと似た症例に言及している。小アジアのアビュドスの男の話だが、同じように座りこみ、自分が舞台上にいるかのごとく、演技をしたかと思うと、手を叩いたり、笑ったりして、まるでその演技に満足しているかのようなようだったという。ヴォルフィウスはブルンセリウスという田舎者について述べているが、その男もこの体液の影響を受けていた。「説教を聞いている最中、彼はある女性が寝ぼけて腰掛から転げ落ちるところをたまたま目にしてしまった。その可笑しさに、その場にいた人の多くも声を上げて笑ったが、彼の場合、度を越して面白かったのか、三日間、笑いが止まらなくなってしまい、そのために衰弱し、その後もしばらく悪化の一途を辿った」。古のソポクレス、デモクリトスその人も、こういった傾向が強く、狂気の陽気に取り憑かれていたという。憂鬱症の人は、他の人よりも聡明で、多くの場合、宗教的恍惚、一種の神がかりを惹き起こし、すぐれた哲学者や詩人や預言者として覚醒するとアリストテレスは述べているが、デュ・ローラン（『憂鬱症論』3）は、血液の混合により少し焦げつくこの種の憂鬱症こそ、アリストテレスが言う憂鬱症だと考えている。またメリクリアーレ（『診察』110）が多血性憂鬱症患者の例として挙げる若い男は「すぐれた知性の持ち主で、学識も素晴らしかった」という。

焦げた胆汁から憂鬱症が生じる場合、患者は大胆で恥知らずで間拔けな気質であることが多く、喧嘩早く、決闘とか戦闘とか男らしさとかそんなことばかり考え、怒りっぽい。話すときもいらいらして、主義信条に関しては頑なで、その信念を曲げようとせず、しかもその内容は法外である。感情をかきたてられると、荒れ狂って暴れ、誰彼かまわず難癖をつけ、喧嘩をふっかけ、自殺したり、殺人に及んだりすることもある。アルナルドゥスはさらに加えて、彼らは発作的に完全な狂気に陥り、「ほとんど眠らず、その尿は薄く、火のように熱い」と言う。グアイネリオ曰く、「発作時に、彼らはヘブライ語やギリシア語やラテン語など、教わったこともなく、知っているはずもないさまざまな言語を話したりする」。アバノのピエトロ（『アリストテレス問題集訳注』1. 30）は、すぐれたラテン語を正しく話す狂女に言及している。ラーゼスもまた発作の際に預言する女性について書いているが、預言されたことは本当に起こったという。グアイネリオ

には、普段は読み書きできないのに、月が太陽に近づき見えなくなると、ラテン語で詩を作ることができた患者の例が載っている。アウイケンナとその信奉者たちは、こういった症状が起こるのは、狂気や憂鬱症が原因というよりも、悪魔の仕業か、彼ら自身が悪魔憑きになってしまったかであり、あるいは、その両方が原因であると論じ、ヤーソン・ヴァン・デ・ヴェルデも同様に、この場合「悪霊が取り憑いている」と考える。しかし、多くの人はこの原因を胆汁に帰しており、特にモンタルト（21）はこの見解を頑強に主張する。彼は、この原因はすべて胆汁とその成分の性質と傾向によるのだと論じ、アウイケンナたちを論駁している。カルダーノ（『事物の多様性について』8. 10）は、とりわけこの種の人は暗殺者に向いていると考え、焦げた胆汁が原因で、大胆かつ屈強、猛々しく冒険好きで、あらゆることに挑戦すると述べる。「この体液によって、彼らは死さえも耐える心構えができ、どんな拷問であっても不屈の勇気で耐え抜くことができる。彼らがそういった拷問を受けても平気である姿は驚嘆すべき光景であり、超自然の出来事のように見える」。カルダーノはこの種の勇猛さや狂躁（愚かさと言うべきか）の原因を胆汁と黒胆汁の焦げ付きに帰しているが、私としてはむしろ、これは憂鬱症の症状ではなく、狂気や自暴自棄の症状としたい。というのも、この胆汁という体液は焦げて熱くなると、悪化して狂気を惹き起こすほうが一般的だからである。

黒胆汁それ自体が焦げて生じる憂鬱症の場合は、アウイケンナ曰く「通例、悲しみに暮れ、孤独を好み、その状態が持続する。それが行き過ぎると、尋常ではないほど疑い深くなり、怯え方が増し、ありもしない辛いことを長きにわたって想像する」。肌は冷たく黒ずみ、内気で孤独を好むあまり、アルナルドゥス曰く「彼らは人と一緒にいることが耐えられず、つねに墓場や死人のことを夢見ている、自分は魔法にかけられているとか、死んでいるとか思っている」。症状がさらに進むと、恐ろしい音が聞こえ、幽霊が見えると言いだし、「悪霊と話したり、悪魔と親しげに会話したり、不可思議な怪物や幻が見えるようになり」（ド・ゴルドン）、あるいは、そういった物の怪に取り憑かれていると考えたり、誰かが自分に話しかけてくるとか、誰かが自分の中にいると思うようになる。アウイケンナを典拠にダ・モンテ（『診察』26）が言うように、「この種の憂鬱症患者は多くの場合、悪魔憑きである」。バルスコン・ドゥ・タラントが治療していた女性は「悪魔と夜ごと関係をもっていると思い込んでいた」という。フォーリーニョのジェンティーレ（『問』55）は憂鬱症の友人について書いているが、その友人は「兵士の姿をした亡霊に」どこにいてもつき纏われていると思っていたという。デュ・ローラン（7）はこの種の例を数多く挙げ、敵から魔法をかけられていると思ひ込む人や、自分は死んでいると思ひ食事をしようとならない人を紹介している。1550年、パリの弁護士がこの種の憂鬱症になってしまい、自分は死んでいるのだと信じ込み、何を言われてもその思ひ込みを捨てず、頑として食べ物も飲み物も摂ろうとしなかった。そこで彼の親戚でブルジュの学者が一計を案じ、彼の目の前で死体の恰好をして食事をしてみせた。すると、ようやく彼は食べ物を口にしたという。この話は、セールによると、シャルル9世の御前で喜劇として上演されたとのことだ。プロイトス王の娘たちの例が有

名だが、自分のことを狼や豚といった獣だと思い込み、犬や狐のように吠えたり、驢馬のようにいなないたり、牛のような鳴き声を上げたりする患者もいる。ヒルデスハイム（『拾遺集』2「狂気と熱狂について」）には、この種の憂鬱症に罹ったオランダ男爵の例が挙げられているし、トリンカヴェッラ（『診察』1.11）にも、自国イタリアの貴人の例が挙げてあり、「自分が獣であることは間違いないとされていて、よく鳴き声の真似をしていた」というが、その人には他にも多くの症状が見られ、この種の憂鬱症であったとみて問題ないであろう。

憂鬱症がこれら四体液の組み合わせ、あるいはエルコレ・サツソーニアが追記するように精気の組み合わせから生じる場合、症状も同様に混じり合う。それぞれの要素が、熱かったり、冷たかったり、乾いていたり、湿っていたり、隠れていたり、混乱していたり、安定していたり、収斂していたり、実体を伴っていたり、いなかったり、その組み合わせに応じて、症状は多様となる。自分のことを巨人だと思ふ人もいれば、小人だと思ふ人もいる。鉛のように重いと思ふ人もいれば、羽毛のように軽いと思ふ人もいる。マルチェッロ・ドナーティ（2.41）はセネカに出てくるセネキオという金持ちの男性に言及している。その男は「自分と自分の持つすべてのものが巨大だと思っていた。妻も巨大で、馬も巨大、小さなものには耐えられず、飲み物を飲むときのポットも巨大、ズボンも巨大、靴も自分の足より大きなものを履いていた」。トラレスのアレクサンドロスに出てくる女性も同様で、「指で世界全体を揺るがすことができる」と思っていて、自分が手を握ると、世界がリングのように握りつぶされてしまうのではないかと恐れていた。またガレノスに出てくる男性は、自分はアトラスであり、肩で天を支えていると思っていた。自分のことをネズミの穴に入れるくらい微小だと思ふ人もいる。頭上に天が落ちてくると恐れる人もいれば、自分は雄鶏だと思ふ人もいる。グアイネリオは、手を叩きながら雄鶏のように鳴き続ける人をパドヴァで見たという。また自分を小夜啼鳥だと思ひ、夜を通して歌い続ける人もいる。自分はガラス製の水差しだと思ひ、誰も近づけさせない人もいて、これに関してはデュ・ローランがフランスで本当に出会ったことがあると述べている。クリストバル・デ・ヴェガ（3.14）とシェンクとマルチェッロ・ドナーティ（2.1）にも多くの例が挙がっていて、その中の一人、フェラーラのパン屋は自分の身体がバターで出来ていると思ひ、溶けてしまうのを恐れて、日射しのもとには座ろうとしなかったし、火に近づこうとしなかった。また、自分のことを風がつまった革袋だと思っていた人の例も挙げられている。笑う人もいれば、泣く人もいる。狂う人もいれば、打ち拉げられる人、塞ぎ込んで苦しむ人もいる。発作的に症状が出る人もいれば、症状が持続する人もいる。聴覚がおかしくなり、空想にすぎないのだが、音楽や恐ろしい物音が聞こえると言ひ出す人もいれば、視覚がおかしくなる人、嗅覚がおかしくなる人もいて、人によっておかしくなる感覚はさまざまである。ルイ11世は身の回りのものすべてが悪臭を放っているという思いに取り憑かれていた。御付きの人たちが強烈な香水をいくつ用意しても、国王の苦痛は和らぐことなく、いつも汚らしい臭いがすると言っていた。デュ・ローランが例として挙げる憂鬱症のフランス詩人は、熱に悩まされ、目覚めもよくなかったので、医師に相談するとポプラの香油をこめ

かみに塗布するよう言われたのだが、その匂いがたまらなく嫌だったらしく、その後何年間も、近づいてくる人がみなこの香油の匂いがするように思われ、遠く離れてでなければ誰と話すことも厭い、服を新調しても同様に香油の匂いがするように思えるので、新しい服を着ようとはしなかった。これ以外のことでは、彼は賢くて思慮深く、話す内容にも分別があったのだが、この一点に関しては別だったという。アントワヌ・デュ・ヴェルディエール曰く、リモーザンのある紳士は、あるとき猪に脚を突かれ、それを恐怖するあまり、自分には脚が一本しかないと思い込んでいた。彼もまたこの点以外は健全だったのだが、両脚揃っているとはどうしても認めなかった。ただ、あるときフランシスコ修道会士が二人やってきて、ようやく、彼からこの間違った考えを取り除くことができたという。この種の話はこれでもう十分だろう。

第1節 第4項

教育、習慣、時間経過、健康状態、他の病気との併発、発作、性向などから来る症状。

症状が多様となる大きな要因は、習慣、修練、教育、性向の違いにもある。「この体液によって、憂鬱症の人に刻み込まれるのは、その人の生活状況や普段の行動に由来する事柄であり、症状の出方は、その人の教育や職業に応じて変化する」。野心的な人が憂鬱症になると、すぐさま自分のことを国王や皇帝や君主だと思い込む。一人歩きしながら、ありもしない将来の昇進を期待し、あるいは想像上ですでに昇進しており、満悦する。その上、君主然たる、あるいは高官や貴人であるかの振る舞いをし、慇懃な挨拶をし、宴を催し、あたかも大物の如き風情である。フランチェスコ・サンソヴィーノの記録にあるクレモナの憂鬱症患者は、どんなに説き伏せても、自分が教皇であることを疑わず、免罪符を出したり、枢機卿を任命したりしているは自分だと信じて譲らなかつた。クリストバル・デ・ヴェガの知人には、自分を自らの王国から追放された国王だと思い込む人がいて、いずれ復権することを強く願っていたという。貪欲な人はつねに土地や不動産を購入することに思いを寄せ、かくかくしかじかの荘園を囲い込むにはどうしたらいいのかと考えを巡らせる。あたかも、自分がすでにその土地の所有者であり、少なくとも保有権があるかの夢想ぶりである。目に入るすべてが自分のものであり、それは事実であっても単なる希望であっても関係ない。彼はすべてを期待して貪り続け、そうでなければ、想像上はすでに自分のものとなっている。アテナイオスには港の船をすべて自分のものだと思う男が出てくるが、これもその一例である。淫らな色男は一日中、愛人を喜ばすことばかり考え、気取った振る舞いや歩き方をするが、その身のこなしは相手の女性が目の前にいなくても関係ない。パンピルスが恋人グリケリウムのことを夢見るように、彼はいつも愛人のことを夢見ているからだ——明け方の夢に恋人が出てくる人は多いが、彼らの場合、これが一日中続くのである。マルチェッロ・ドナーティによると、エリオノーラ・メリオーリーナというマントヴァの貴婦人は、いつ会っても自分を国王の妃だと思い込んでいて、「目の前に国王とその取巻きがいるかのごとく、よく跪いて話を

していた。また路上や堆肥塚の中にガラスの欠片を見つけたりすると、夫である国王から贈られた宝石だと言ったという」。敬虔で宗教的な人の場合は、つねに断食、祈祷、儀式、施しを行い、解釈、幻視、預言、啓示のことばかり考えている。この種の人は聖霊の導きを受け、靈感に満ちており、救済される者もいれば、墮獄する者もいる。彼らはつねに自分の罪に心痛め、そのために悪魔に取り憑かれることが多いのだが、これについては、第三部の恋愛憂鬱症のところで詳述する。学徒の頭は学問のことで一杯、自分の業績を自画自讃、少なくともそうしたいと願っている。次は間違えてしまうのではないかと恐れる者もいれば、あらゆる批判を軽蔑する者もいる。他人を羨む人もいれば、他人と張り合う人もいて、あるいは、延々と続く辛い瞑想によって燃え尽きてしまう人もいる。その他の性向でも同様で、どの場合も、物事の印象の強烈さの度合いや、体液それ自体の濃度の度合いに応じて多様な症状を見せる。事実、憂鬱症には軽度なものもあり、その場合、外見や身のこなしには異常なところは見られない——しかし、当の本人にとっては耐えがたき重荷であり、実際、堪えきれなくなってしまう。症状の中には「わかりやすいものもあり」、いつ見ても誰の目にも明らかである一方、「わかりにくいものもあり」、ほとんど気付かれず、自分から言い出さない限り、誰にも気づかれず、怪しまれることもない。エルコレ・サツソーニア曰く、「私自身、何度も目にしてきたが、彼らは悪化した想像力を外部に示さず、自らの内部にしっかりと隠しているので、非常に賢明な人間として通っている。怯える人もいれば、まったく怯えない人もいる。たとえば、自分のことを国王であるとか死人であるとか考える人のように、兆候を多く示す人もいれば、兆候が少ない人もいる。大きな兆候を示す人もいれば、小さな兆候しか示さない人もいる」。心配する人、落ち着かない人、いつも怯える人、悲しむ人、嘆く人、疑心暗鬼の人がいるかと思うと、笑ったり、歌ったり、泣いたり、苛立ったりする人もいる。また、すでに述べたように、症状の発作的な人もいれば、症状が持続し慢性的になる人もいる。あることにのぼせ上がったたり、子どもじみた態度をとったり、馬鹿げた振る舞いをする人もいて、そういう人はその点ではいかかわしいのだが、それ以外のことでは総じて分別があり、賢明である。あるいは、性向に難を抱える人もいれば、習慣に問題ありの人もいる。このように、この体液の度合いは様々なので、温度と同じように表記できるかもしれない。たとえば、この人は黒胆汁8度とか、この人は2度低いとか、この人はその中間であるといった感じに。あるいは、過半数として「黒胆汁の度合い、二分の三、三分の四、三分の五、五分の七など」と表記できるかもしれないが、こういった比率では憂鬱症の度合いを表わすには数値が小さすぎる。「発作的に症状が現われ、消える人が多いが、症状が持続する人もいる」。またベネデット・ヴィットーリが言うように、「春と秋にだけ悩まされる人」もいれば、ローマで活躍したガレノスが言うように、年に一度だけ症状を見せる人もいる。症状が出るのは、月が合の位置に来るとき、惑星が不吉な星位に来るとき、満ち潮などの決まった時刻や特定の時間にだけの人もある。またプラタが注記するように、妊娠期間にだけ症状が出て、それ以外の時には決して症状が出ない女性もいる。症状の出る場所がいつも一定で決まっている人もいれば、関節炎や反復性痛風のように鬼火の気まぐれさで、症状の出る場所が移動し、変化する人もいる。身体中のあちこち、あらゆる関節に症

状が出て、いつもどこかしら悩みを抱えている。身体に問題がない場合も、さまざまな形で症状が現われ、頭を悩ますことになる。これとは別に、人生に一度だけ、あるいは、七年に一度、五年に一度、激しい発作で症状が出る人がいる。この場合、狂気の極みにまで達し、死や毫碌に至ることもある。また、陰鬱な事件や、心の動揺、恐ろしいものがきっかけで症状が出る人もいるし、はじめて症状が出て、一時的な症状ですみ、そのあとは決して症状が出ない人もいる。第三種は、普段は問題ないのだが、厄介なものや、星回りの不運、災害、激しい感情の発露がきっかけで三年から四年に一度症状が出る人たちである。第四種は、忙しく頭を働かせたり、動いていたり、満足していたり、仲間と一緒にいるときには、陽気で顔色もいい。また暇になったり、一人になったり、死ぬ間際になったり、楽しい夢や空想で法悦状態にある場合も問題ない。しかし、一旦、挫折し、落胆すると、

彼の心には、悲しみ以外、浮かんでこない。

突然、表情が変化し、心は重くなり、魂は気怠い思いに苦しみ、瞬時にして、塞ぎ込み、人生に倦み、自殺してしまう。第五種は若いうちに嘆き、第六種は中年になって悩み、第七種は老年になって苦しむ。

かくして、憂鬱症については、次のように総括できる。最初のうちは、一人きりになり、家の中で過ごし、一人歩きをし、冥想し、一日中床の中で横になり、目覚めながらにして夢見、さまざまな絵空事を思い浮かべるだけなので、極めて心地よく、憂鬱症は、いわば心の喜ばしき過ち、非常に愉快な気質なのである。彼らはこのようにしているときほど幸せなときはなく、まさに天にも昇る気分、ゆえにこの夢想を遮られることに耐えられない。邪魔をされると、ホラティウスに出てくる人物が言うように、

友よ、まさに、君たちは私を救ったのではなく、殺したのだよ、

と文句を言う。そんなことを続けていたら厄介なことになるとか、最後はひどい目にあうとか、いろいろと忠告してみたところで同じこと、彼らは「自分の吐瀉物を喰らう犬」、あまりに心地よいので止めることができない。こうして、気質の強力な魅惑により、ともすると、この状態は何年も持続し、仕事などで妄想が中断されることはあっても、最終的には、想像力が破綻し、そうなる頃には、空想癖から抜け出すことはできず、破滅の道を歩まざるをえない。突如として、場面は転換し、恐怖と悲しみとが心地よい空想にとってかわり、疑心暗鬼、不満、絶え間ない不安がその後続く。じわりじわりと、無為と引籠りが習性となり、それに押し出される形で、この憂鬱症という野蛮な悪鬼が舞台上に出て来、「上が天空まで伸びる分、下は冥界にまで伸びる」。もはや、最初の頃のような心地よさはなく、今は苦しみと辛さのみとなる。蝕まれた魂は、

気苦勞と不満で衰え、彼らは人生に倦み、焦燥と苦惱と逡巡と不安とにより、言い表せないほど惨めな状態にまで真つ逆さまに落ちていく。人と一緒にいることが耐えられず、光と人生そのものを避けるようになり、動くことさえできなくなる者もある。身体は痩せこけて干乾び、萎びて醜く、目つきはきつく、物腰は鈍く、魂は苛まれる。ただ、その度合いは、黒胆汁の濃度や、罹患時間に応じて異なる。

アラブ人ラーゼスはこれらすべての症状を、よりよく識別するため、三段階に分けている。第一段階は「虚偽の思考」、無益な思考。この段階では想像したり、恐怖したりするものすべてについて誤った考えをもち、それを膨らませ、増大させてしまう。次は「虚偽の思考を口にする」段階。独り言を言ったり、不明瞭で意味をなさない言葉を発したり、時代がかった身振りをしたり、頭や心に浮かぶ訳の分からぬことを口にしたり、あるいは笑ったり、泣いたり、黙ったりすることでその思いを表現し、眠れなくなったり、食事ができなくなってしまう。そして第三段階になると、考えたり、話したりすることを実行に移すようになる。サヴォナローラ（『主要な医術』11. 8. 1「頭部の病」）も同じように主張している。「患者が心に浮かぶことを口に出し始めたり、独り言を言ったり、ふらふらとあてもなく歩いたりする場合」、すなわち、ド・ゴルドンが「頭も尻尾もない」と形容する状態は、まだ中間段階なのだが、「怪しげな行動をとり始めたり、愚かな空想を実行に移したりする場合は、深刻な憂鬱症であり、狂気そのものである」。この憂鬱症の段階的進行は、この病気に罹った人を見ればすぐに見て取れる。最初のうちは独り微笑を浮かべているだけなのに、最後には声をあげて哄笑するようになる。最初のうちは孤独を好んでいただけなのに、最後には人と一緒にいることが耐えられなくなる。たとえ人前に出られたとしても、もはや魯鈍で、恥も外聞もなく、すっかり塞ぎ込む。自分が言ったりしたりすることにはまったく無頓着、その言動や振る舞いは、気狂いじみ、あるいは馬鹿げている。最初のうちは知性に問題が生じ、言われることに集中できず、話をされて「何だって」と問い返す程度なのだが、最後には、老婆、あるいは一人にいる老人がよくするように、ぶつぶつと独り言を言うようになり、突然、笑い出したり、大声を出したり、ほんやりしたかと思うと、逃げ出したりする。また、笛吹や悪魔や小鬼や幽霊があらわれたり、歩いたりするのを見たり聞いたりしたと言い出したり、終いには狂い始める。ホラティウスの詩に出て来る「かつては召使が二百人いたが、今は十人しかいなかった」男のように、最初のうちは繰り返し服を着たり脱いだりしているだけなのだが、終いには注意散漫となり、分別をなくして愚かとなり狂気に陥る。狼のように遠吠えしたり、犬のように吠えたり、アイアスやオレステスのように喚いたり、たとえば、デ・カステロ・ブランコが『百の治療法』（3. 55）で挙げる患者のように、他の人には聞こえない音楽や叫び声が聞こえたりするようになる。あるいは、シュプレングが言及する女性のように、いくつもの言語を話したり、悪魔に憑依されていると口走ったりする。また、プロスペロ・カラーニが例として挙げる農夫は、イタリアのボローニャで彼の師匠にあたるアレッサンドロ・アキリーニと哲学と天文学について学識豊かに話し、議論したという。この類の話については、すでに述べたので、

ここではこのくらいにしておこう。

こういった症状については、十分に語り尽すことはできないし、十全に理解するための規則を見出すことも不可能である。アウソニウスの詩でエコーは、自分を描こうとする画家に言う。「君の努力は間違っている」。愚か者よ、「私の姿を描こうとするなら、私の声を描きなさい」と。これと同じように、憂鬱症を描こうとするなら、気まぐれな空想や、病んだ想像、虚しき想念などを描かねばならぬのだが、これらは実に多様で、誰も描き尽すことはできない。二十四文字のアルファベットは、異なる言語で、多種多様な言葉を作り出すが、これと同じように、憂鬱な空想は、異なる患者のうちに、多種多様な症状を生み出すのである。彼らの空想は、不規則で不明瞭、多種多様で無限であり、変幻自在のプロテウスでさえ、その多様さには及ばない。憂鬱症患者の真の性質を見極めるくらいなら、月の裏面を見極める方が容易である。憂鬱症患者の芯となるべき部分を見出すくらいなら、空中における鳥の動きを看破する方がたやすい。彼らの症状はそれほど込み入っており、多様で、しかも他の病氣と混ざり合う。すでに示したように、憂鬱症はその種類自体が複雑であり、それと同様に症状も、さまざまな病氣——頭痛や悪液質や水種症や結石症など——と混じり合い複雑である。たとえば、ヒルデスハイム（『拾遺集』2）やメルクリアーレ（『診察』118, 6, 11）の例にあるように、頭痛や癲癇や持続勃起症と併発、トリンカヴェツァ（『診察』1, 12, 3, 49）が指摘するように、痛風や犬型欲望症を伴うこともある。またダ・モンテ（『診察』26, 23, 234, 239）にも、癲癇、頭痛、眩暈、狼憑き等との併発の例があり、ジュイーオ・チェザーレ・キオディーニ（『診察』4, 89, 116）は、痛風、瘡、痔、結石等との併発例を挙げている。これほど他の病氣と混じり合う憂鬱症の症状を、どうやって識別すればよいだろうか。あるいは、これらを分類し、その識別方法を見出すにはどうしたらいいだろうか。これは極めて困難な作業だと言わざるを得ないが、ここまで、私は私なりに憂鬱症の症状を扱ってきた。次項からは各論に移り、憂鬱症の種類に応じた症状を扱うつもりである。というのも、ここまでは、総論的用語を用いて、より一般的症状を説明し、先人達の記述に挙げてある、よく見られる症状について手当たり次第に語ってきたからである。ゆえに、ここに挙げた症状が一人の患者にすべて見られるというわけではない。もしそうだとしたら、それは一人の人間ではなく、怪物、あるいはキメラを描くようなものである。そうではなく、ある人には、いくつかの症状が見られ、また別の人には、また別のいくつかの症状が見られるのである。また、そういった症状が連続する場合もあるし、断続的に何度も現れる場合もある。

ここまで憂鬱症の症状を詳細に描写し、伝えてきたのは、惨めな人々を非難したり、軽蔑したりするためではなく（むしろ私は彼らを憐れんでいる）、彼らをよりよく理解し、治療を施し、また、我々の中でもっとも優れた人、もっとも健康な人でさえ、極めて危険な状態にあることを示すためであった。我々は、その移ろいやすい状態を、大いに恐れるべきなのである。そして、自分の内に苦難と虚栄心とがあることを自覚し、自らを精査して謙虚になり、神を求めて慈悲を

乞わねばならない。我々は自分を罰するための鞭を探す必要などない。神の恩寵の光と天の真理とが我々を照らしてくれなければ、我々は自分の内奥に鞭を抱え、魂は惨めな囚われの身となってしまうからである。だからこそ、我々は思慮分別をもち、節制を守り、こういった危険の中で、もっと慎重に、そしてもっと用心深くならなければならないのである。

第2節 第1項

頭部憂鬱症の症状。

「恐怖と悲しみが続いているのに、腹部に症状が見られず、血液にも異常がない場合、脳自体に問題があると考えべきである。この場合、脳の中で黒胆汁が生成されているか、脳の中に黒胆汁が流れ込んでいる。あるいは脳の機能不全により黒胆汁が生じているか、炎症によって黒胆汁が脳にたまっている」とル・ボワは述べる。しかし、これは必ずしも正しい見解ではない。というのも、頭部憂鬱症では、しばしば血液と下肋骨が同時に異常をきたすからである。エルコレ・サツソーニアの見解は、この点において他の著作家たちの唱える通説とは異なり、頭部憂鬱症に特有の症状は、脳内の精気が熱くなったり、冷たくなったり、乾燥したり、湿ったりする異常からのみ生じるとし、「すべては、体液そのものとは関係なく、精気の動き、あるいは精気の翳りに起因する」と主張、体液の焦げ付きによって生じる憂鬱症については、別個のものとして論じ、その症状と治療法については別立てしている。黒胆汁が頭部に濃く存在する場合に共通する兆候は、「赤ら顔であり、血色が良すぎて顔の大部分が真っ赤になる」（ル・ボワ）ことだが、青みがかったり、面皰が増えたり、目が充血することもある。この件については、アウイケンナ（3.1.4.18）参照。ウリエ註解のデュレは、顔の非常な赤らみを、頭部憂鬱症の主要な症状とし、モンタルトやガレノス（『患部について』3.6）を典拠とする他の著作家たちも、同様の見解である。エルコレ・サツソーニアは、赤ら顔の他に、「頭部が重苦しくなること、視線が据わること、眼が虚ろになること」を症状として追記する。またモンタルト（17）曰く、「頭部憂鬱症が脳の乾燥から生じる場合、頭部は軽くなり、眩暈を起こしやすく、眼は冴え、何カ月も眠ることなく過ごす傾向がある。眼脂や鼻汁はほとんど出ず、極度な乾燥のためしばしば禿頭となる」。これとは逆に湿気から生じる場合は、気怠さ、眠気、頭痛といった症状が出る。またサルスティオ・サルヴィアーニ（2.1）が自身の経験から述べているように、頭部に体液が大量にあると、癲癇を惹き起こしやすくなる。彼らは極度な恥ずかしがり、血色のいい場合は、あらゆる状況——恐怖が伴う場合は特に——で頬を染め、赤くなりがちである。しかし、すでに述べたように、この種を識別するもっとも重要な症状は、腹部や下肋骨等に、顕著な兆候、モンタルトの言葉を使えば「注目に値する」兆候が見られないことである。なぜ「顕著な」という但し書きをするかということ、腹部の異常はしばしばどの憂鬱症にも共通して起こるからである。たとえば鼓腸は三種の憂鬱症すべてに共通し、どれも例外とはならない——ただウリエが言うように、下肋骨憂鬱症の場合、鼓腸の症状は他の

二つよりも「激しく出る」。アエティオス（『テトラビブロス』2. 2. 9, 10）も同様の主張で、他の部位よりも頭部により顕著な兆候が出る場合を、頭部憂鬱症と診断し、その対策として、ガスを生じない食物と、良質な飲料を摂取することを挙げており、頭部憂鬱症の場合でも、鼓腸や血液不良を症状として除外していない。しかし、すでに示したように、これら三種は混同されることが多く、それゆえその症状も混同されやすい。精神上的の症状は思考が過剰となり、それが持続することである。アウイケンナによると、「頭部が熱を帯びると、血液が焼け、そこから黒胆汁が霧状に生じ、精神に影響が出る」からである。モンタルト（24）曰く、彼らは非常に怒りっぽく、すぐに熱くなる。孤独を好み、悲しげで、寡黙であることが多く、警戒心が強く、いつも不満を抱いている。何か気に入らないことがあると、眠れなくなり、他のことで気がまぎれない限り、疲れ果てるまでずっといらいらしている。恐怖や悲しみといった感情が激しく、心も著しく乱れるのだが、それほど持続性はない。陽気で、突如、哄笑したりすることもあるが、これは比較的稀であり、ガレノスを典拠に血液の混合のせいだと説明される。「赤ら顔の人は、冗談を好み、しばしば、人を嘲笑し」、うぬぼれる。またガレノスのこの言葉に注釈をつけたロドリゲス・ダ・ヴェイガによると、彼らは陽気で、機転が利き、気質も愉快なのだが、すぐさま激しい憂鬱症に変化する。さらにアレタイオス曰く、「彼らは教わらずして、すべてを学ぶ」。デュ・ローランによると、自分の身体がガラスや羽毛でできているとか、自分のことを水差しだとか思い込む患者や、奇妙な言葉を発する患者の場合、その激しい情動や症状は、「脳の熱から」生じる。

第2節 第2項

鼓腸性憂鬱症、すなわち下肋部憂鬱症の症状。

クラトはある良家の女性を診察し、「この下肋部憂鬱症、すなわち鼓腸性憂鬱症の場合、症状が極めて曖昧であり、すぐれた医者であっても、患部がどこにあるのか判別できない」と述べている。マティアス・フランコヴィッツも、ある貴婦人の診察の際に同様の見解を披露する。この病気に関しては、ウリエ、フラカストロ、ファロピオ等同様、下肋部憂鬱症との診断は下すが、身体のどこが特に悪いのか、症状からは判断することはできない。患部は子宮である、と主張する人もいれば、心臓、胃など他の部位を主張する人もいる。それゆえクラトは、この病気にはよく様々な症状が伴うので、「どこが患部なのか正しく指摘できる医者はいない」とまで断言する（『診察』1. 24）。ガレノスの『患部について』には、この病気によく見られる症状が数え挙げられており、最近の作家たちもディオクレスを典拠に、それを繰り返している。ただガレノスは、ディオクレスが症状として恐怖と悲しみを挙げていないのは間違いだとする。これに対し、トリンカヴェツラ（『診察』3. 35）はディオクレスを支持する。というものの、頭と体格がしっかりした人や、雅量のある人、勇敢な人の場合は、勇気があるので、こういった症状は現れないからである。これについて私はエルコレ・サッソーニアと同意見で、すでに述べたように、恐怖と悲し

みは一般的症状ではない。というのも、恐れて悲しまない人や、悲しんで恐れない人、恐れも悲しみもしない人がいるからである。恐れと悲しみ以外の症状としては、「大きな嘔が出たり、消化不良になったり、内臓が熱を帯びたり、腸にガスがたまったり、腹鳴があったり、腹部や胃に激しく刺すような痛みが走ったりする。また消化に悪い食事をすると、胃に水分がたまり過ぎたり、唾が水っぽくなったり、冷汗が出たり、全身から時ならぬ汗が噴き出したりする」。オクタウィウス・ホラティアヌス (2. 5) によると、「関節が冷えたり、消化不良になり、嘔が始終出たり、下肋部にガスがたまり続けたり、腹部が熱を帯び、刺すような痛みが走ったり、内臓や横隔膜が上方に引き攀ったり、目が充血したり、蒸気やガスで膨張したりするので耐えられない」。耳鳴りがしたり、発作的に眩暈になったり、夢でうなされたり、乾燥して痩せこけ、どんな時でも汗をかく。皮膚や顔の色はさまざまであるが、多くの人は特に食後、血色がよくなる。枢機卿カエキウスが大いに苦しんだというのはこの症状で、食事をしたり、ワインを飲んだりすると、あたかも市長の宴にでも参加したかのように、顔が真っ赤になってしまう、と医者のプロスペロ・カラーニに泣きついている。この症状だけをとってみても、苦しめられる人の数は多い。このように赤くなる人もいれば、黒くなったり、蒼白くなったりする人もいる。また肩や肩甲骨が痛んだり、全身に痙攣が走ったり、突然震えだしたり、動悸が始まったり、胃の噴門部に痛みを感じたりするので、患者の中には心臓を病んでいるのではないかと思う人もいる。さらに息が詰まったり、息切れしたり、呼吸困難になったり、脈が強くなったり、気絶したりもする。モンタルト (『診察』55)、トリンカヴェッタ (『診察』3. 36, 37)、フェルネル (『診察』43)、フランボワジュールのニコラ・アブラム (『医療診談』診察 1. 17)、ヒルデスハイム、ジュイーオ・チェザーレ・キオディーニ等は、症状を各部位に分けて例示するが、以下は、各部位に特有の症状である。胃から生じる場合は、サヴォナローラ曰く、苦痛に満ち、ガスが充滿する。またグアイネリオがさらに加えるところによると、眩暈と吐き気が起き、唾液が増える。上腹部から生じる場合は、下肋部にガスがたまって膨張し、食物が上がってきて吐き気が生じる。心臓から生じる場合は、心臓に痛みと痙攣が走り、身体が重く感じられる。肝臓から生じると、通例、右下肋部に痛みが生じる。脾臓から生じると、左下肋部が硬化して痛くなり、アウイケンナによると、腹鳴をもよおし、食欲は増すが、消化は不調となる。反対側の腸間膜静脈と肝臓から生じると、エルコレ・サツソーニア曰く、食欲は減退、あるいは、まったくなくなることもある。そして下肋部から生じる場合、腹鳴し、炎症を起こし、調合が妨げられ、しばしば嘔を伴う。そして、これら未消化のものから、ガスが生じて蒸気となって脳に至り、それが想像力を苛み、恐怖や悲しみや気怠さや気重さを惹き起こし、多くの恐ろしい想念や怪物を生み出す。レメンス (1. 16) 曰く、「黒く暗鬱とした雲が太陽を覆い、日差しを遮るように、この黒胆汁の蒸気は精神を曇らせ、多くの不条理な考えや想像を抱かせる」。身体の下の方から脳へと「まるで煙突の煙のように」昇ってきて、善良で賢く、誠実で分別のある人々を毫碌させ、彼らの人柄や職業や賢智に相応しくない言動をとらせるのである。このように脳に蒸気が上昇し、腹鳴を生じて、刺すように痛むので、彼らは、腸の中に蛇がいるとか、あるいは、蛙がいるとか言ってきた。トラレスのアレクサンドロスには、鰻か

蛇を呑み込んでしまったと思っている女性の話が載っている。フェリクス・プラタ（『症例』1巻）が紹介する例は、極めて印象的である。彼と同郷のスイス人男性は、あるとき、穴に落ちてしまい、そこにたまっていた水を少し飲んでしまったのだが、そこには蛙がいて、卵も産み付けられていた。この男性は、このとき、蛙の卵も一緒に呑み込んでしまったのではないかと疑うようになり、その考え、恐れ、想像はどんどん膨らんでいって、ついにはその卵から孵化した蛙がたくさん自分の腹の中において、「自分の栄養分で生きている」と考えるようになり、すっかりその考えに取り憑かれてしまって、その後、何年もこの間違った考えを正すことはできなかったという。しかも、この男性は、自分を治療するために七年間も医学を勉強し、イタリア、フランス、ドイツにまで足を伸ばし、最良の医者たちに、この事を聞いて回った。1609年に受けた診察では、単なる鼓腸で、考えすぎだと言われたのだが、「歯を喰いしばって反論し、持論を口頭や紙上で証明しようとした」。何を言われても無駄であった。これは鼓腸なんかではない、本当の蛙なのだ。「あなた方には蛙が鳴いているのが聞こえないのか」。プラタはこの男の便に生きた蛙を入れることで、彼を騙すこともできたのだが、彼自身医者であり、この策には引かからなかったであろう。彼は「この件以外では、分別があり、学識豊かな男」だったのである。結局、このように耄碌すること七年の後、彼は「この思い込みから解放された」。この手の話をお望みであれば、デュローランとグラールに、たくさん例が挙がっている。他の種類の憂鬱症にない利点として、この鼓腸型憂鬱症には共通して平穩期が見られる。この憂鬱症の症状や痛みは、通例、他の種類のものよりも持続性がなく、発作的に生じ、恐怖や悲しみなども同様である。しかし、ある点では、他の種類よりも過剰である。それは、鼓腸が原因で、彼らが快楽趣味となり、抑制がきかず、性的快楽に耽りやすいという点である。「彼らはすぐに恋に落ち、ほとんど選り好みせずに愛する」（ヤーソン・ファン・デ・フェルデ）。ラーゼスも同意見で、彼らの多くはウェヌスの影響を受けるという。精神的症状に関しては、これら以外は他の種類の憂鬱症と同じである。

第2節 第3項

全身に黒胆汁が充満する憂鬱症の症状。

この種の遍在性憂鬱症患者の身体は、たいいてい黒く、「黒胆汁が全身に充満している」。彼らは毛深く、瘦身で、血管が太く、その血液は濃くて粗雑である。「脾臓が弱く」、肝臓は黒胆汁を生成しやすい。彼らはひどい食事を摂り続けているか、痔や月経などで排出が滞っている。トラレスのアレクサンドロスが治療に際し、患者の排出の停滞を注意深く調べ、その表情が黒ずんでいるか、赤らんでいるかを観察しなければならないと述べる。というのも、フォレーストとウリエが論じるように、患者が黒ずんでいる場合は、生来の黒胆汁が多すぎることから生じているからである。これに対し、心労や苦悩や不満、劣悪な食事や運動不足から生じる場合は、患者の表情は黒くなるだけでなく、赤くなったり、黄色くなったり、蒼白くなったりする。ただ、いずれの

場合も、全身の血液は腐敗している。モンタルト（22）曰く、「この種の患者は、しばしば色が黒く、または赤い」。この種の憂鬱症を見極める最良の方法は、瀉血してみることである。血液が腐敗して、濃く黒く、しかもその患者に下肋骨憂鬱症や頭部憂鬱症の症状が見られず、そういった症状に苦しんでいなければ、「全身性」憂鬱症と診断される。この腐敗した血液から立ち昇る蒸気が、患者の精神を乱す。彼らは恐怖と悲しみを抱き、心は重くなり、他種の場合と同様、落胆し、不満をもち、孤独を好み、寡黙になり、人生に倦み、鈍重で陰鬱となったり、あるいは、陽気になったりする。そして、症状が進むと、まさにアプレイウスが自分の敵に降りかかればいと呪ったことが、真実となる。「彼らの心には、つねに死者の骨やお化けや幽霊があって、角を曲がるたびに、そういったものに出くわす。夜にはお化けや恐ろしい怪物、墓場や墓地では子供だましのお化けが眼前に現れる。あるいは、暗闇に一人でいると、女か子供のように、そんなものを想像して怯える」。悲惨なことを聞いたり、読んだり、見たりすると、そのことが頭から離れなくなる。彼らは死を恐れ、それでいて、人生には倦み、つねに満ち足りない気分で、全世界を向うに回して喧嘩を売り、激しく罵り、皮肉気に非難する。というのも、そうする以外に、彼らは激情を吐き出すことができず、間違っていると思うことを正すことができないからである。そして最後には、その非難は自分たちに跳ね返り、彼らは自殺することになる。

第2節 第4項

未婚女性、修道女、寡婦の憂鬱症の症状。

スペインの高名な医者、ルイス・メルカド（『婦人病論』4）とロドリゴ・デ・カストロ（『婦人病概論』2.3）——この見解についてはヴィッテンベルクのダニエル・ゼネルト（1.2.13）等も追随している——は、最近出版された著作の中で、未婚女性、修道女、寡婦に関する憂鬱症を、私がこれまで論じてきた他の種類の憂鬱症とは区別されるべきものとして論じているが、これは正しい。というのも、この種の憂鬱症は、女性特有の原因から生じるものであり、男性やその他の女性が陥る憂鬱症とは大きく異なっているからである。憂鬱症の症状を概観するこの節において、こういった女性たちに特有の兆候について無視するわけにはいくまい。

未婚の年配女性、寡婦、不妊女性が陥るこの恐ろしい病気の原因については、ヒポクラテス、「クレオパトラ」、モスキオーノスや婦人疾患に関する古代の作家たちを典拠に論じられている。メルカド曰く、月経により生じた悪質な蒸気により、脳や心臓や「横隔膜が傷つくことで」生じる。またロドリゴが追記するには、腐敗した卵子から生じる煙状の蒸発により、特に「背中付近の動脈が炎症を起こすことで」、脳や心臓や精神に支障をきたす。ただし脳の場合は、これ単独ではなく、他の原因と同調する形で起こる。「実際、この精神状態のすべての原因は子宮から生じ、すべての病は経血から生じる」。そして、ここから心労、悲しみ、不安、精気の乱れ、苦悩、絶

望といった症状が出、そこに「愛の激情や」激しい感情や心の乱れが「伴うと」、その症状は強まったり、弱まったりする。この憂鬱症には寡婦が罹ることが多いが、それはこれまでの人生が大きく変化することによるひどい心労と悲しみの結果である。また産褥期の女性が罹る場合は、「排出が滞ることが」原因である。上述の理由からこの病気になるのは、修道女や年配の未婚女性、あるいは子どもが産めない女性であり、ロドリゴ曰く、「他の女性よりも罹りやすい」のだが、その他の女性が除外されるわけではない。

これらの原因から、ロドリゴはアレタイオスと同じく、この病を「魂の苦惱」と定義する。彼女たちは些細な、取るに足りないことがきっかけで、あるいは、何のきっかけがなくても、突然、悲しみに襲われ、ある種の静かな耄碌状態に陥り、頭、心臓、胸、脇腹、背中、腹部などに痛みを抱え、孤独を大いに好み、泣きじゃくり、心を取り乱すのだが、突如、その状態から解放されることもある。というのも、これらの症状は発作的に生じても消えもし、他種の憂鬱症ほどには持続性がないからである。

しかし、このような簡単な記述はひとまず措くとして、もっともよく見られる症状は、背中付近での脈動であり、これはほとんど永続的な症状である。またアレタイオスが述べるように、腕や膝や拳付近の皮膚が荒れ、不潔になることも多い。横隔膜と心臓神経は炎症を起こし、激しく鼓動する。そして蒸気と煙霧がかき立てられ、上の方へと昇っていくと、心臓それ自体が鼓動を強め、ひどく痛み、衰弱する。「乾燥のため、喉が閉ざされ、これはヒステリーの発作と似ていて、区別は難しい」。「下腹部からは何も排出されないことが多いが、臭いがきつく、胆汁を多く含む黄色い尿が少量出ることもある」。メルカド曰く、彼女たちは、ひどい頭痛や、心臓や下肋骨付近の痛みを訴えることが多い。同様に、胸部に痛みを感じることもあり、その場合の痛みは激しいことが多く、卒倒しやすくなることもある。顔は炎症を起こして赤らむ。彼女たちは乾燥していて、喉の渇きを訴え、突然、興奮して熱くなり、鼓腸に大いに苦しんだり、眠れなくなったりする。そして、ここから、「著しい耄碌」、睡眠障害、悪夢、「馬鹿げたほどの恥じらいと尋常ではない遜り」、異常な想念と見解、意気消沈、大いなる不満、荒唐無稽な判断といった症状が生じる。あらゆるものを忌み嫌い、軽蔑し、倦む傾向があり、どんなものに対しても退屈を感じる。そして、彼女たちはやせ衰え、忠告も聞かず、よく泣いたり、震えたりする。臆病で、怖がり、悲しみに暮れ、よりよき未来が訪れるという希望を抱くこともない。しばらくの間は、何事にも喜ばず、ただ一人でいて、孤独になりたいと思う——そうすることは害にしかならないのだが。この蒸気が続く限り、彼女たちはこのように病むのであるが、しばらくすると、かつてのように、陽気で朗らかとなり、どんなときでも歌を歌ったり、仲間と会話を楽しんだり、笑ったりするようになる。つまり、これらの症状は発作的に起こるのである。ただ、病気が慢性的な場合は別で、その場合、頻度は増え、症状もひどくなり、より持続するようになる。彼女たちの多くは、自分の状態を言葉でどう表現したらいいか、どんな症状なのか、どこが苦しいのかがわかっていない。

ゆえに、彼女たちを理解し、言っている内容を正しく把握することは不可能である。また症状がひどくなり、意識が朦朧としてくると、呪文をかけられていると考えたり、絶望に陥ったりし、「嘆きと絶望に陥り、胸と下肋骨に痛みを感じる傾向がある」。それゆえ、メルカドが追記するように、胸が痛む場合もあれば、下肋骨や腹部や脇腹が痛む場合もある。心臓が痛むときもあれば、頭が痛むこともある。熱に苦しむこともあれば、鼓腸に苦しむこともあり、あれやこれやと、彼女たちはあらゆる部分に悩みを抱える。それでいて、どんなに辛い痛みに見舞われ、どんなに激しく苦しむとしても、どこがどのように痛いのか、彼女たちは説明することを拒み、あるいは、説明することができない。彼女たちは、しばしば、嘆き悲しみ、ため息をついては涙し、つねに不満を漏らしているのだが、大抵の場合「明らかな原因は不明」とされる。しかし、彼女たちが嘆き苦しむ際、悪霊に悩まされていると思いついでいる場合があり、ロドリゴによると、これは特にドイツ庶民の女性の間が多い。ロドリゴは女性におけるこの病気を三段階に分けているが、最重度の患者は絶望し、間違いなく、予言されているか、呪文をかけられており、毫釐も進み、人生に倦み、中には自殺を図ろうとする者もいる。幻影が見えると言う者、精霊や悪魔と話ができると言う者、自分は必ず地獄に落ちると思う者、裏切りに怯え、危険などが差し迫っていると恐怖する者、口をきかず、問いかけにも一切こたえない者など、いろいろいる。ただ、彼女たちの多くは、発作的に、取り乱し、狂ったり、愚かになったりすることで共通している。このように症状は、彼女たちの病気の重篤度や体液の濃淡に応じて多様であり、その症状は、外的物象や心の乱れ、孤独、無為などの影響を受け進行する。

若い女性が、上に述べた事柄、まさにそれが原因で罹る病気は他にもたくさんあり、しかも、生命にかかわる病気が多いのだが、ここでその病名を列挙することは控えたい。ここでの議論の主題は憂鬱症に限られるのであるから、そこから逸脱するのはやめておこう。この病に対する幾つかの食事療法——摂取しすぎは厳禁——、瀉血、浣腸、内的治療、外的治療については、ロドリゴ・デ・カストロ、ゼンネルト、メルカドが幅広く、多様に論じているので、試してみたい向きは、機会があれば、試してみてもいいと思う。しかし、最良で確実な治療法は、良い嫁ぎ先を見つけ、しかるべき時期に、良い夫と娶せることである。「ここが涙の出どころ」、まさにこの病気の主要因であり、最良の治療法は、彼女たちの欲望を満たすことなのである。しかし、だからと言ってももちろん、目の前に現れる男性に対し、次から次へと、後先考えず、忠告も聞かず、周りも見渡さず、判断力を失って、手に負えないほど積極的にふるまい、身を投げ出すような愚かで淫らな尻軽女や、ふしだらな浮気妻に成り下がるよう、彼女たちに推奨しているわけではない。純潔で真面目な乙女に対しては、宗教やしつけや教育や健全な説教、あるいは良縁の見込みや名声を持ち出すことで、そういった行為を禁じたり、先送りにしたりすることはできるのだが、そうでない場合は、労働や運動に従事させたり、徹底的食事制限を行ったり、厳しく接したり、脅したりする方がより適切であり、これにより気質の悪化を弱めたり、逸らしたりすることができる。というのも、忙しく働き、肉体労働に従事する住み込みの召使や、貧しい女中は、年配であっ

ても、この病気には滅多に罹らない。また同様に日々の暮らしに忙殺されている無骨な田舎娘も、この病気になることは稀である。ただ、高貴な身分の乙女や良家の女性、すなわち、独り身で暇を持って余して安寧に過ごし、活発に動いたり働いたりすることなく、大きな屋敷で陽気な仲間囲まれ、羽振りのいい暮らしをしている女性たちこそ、この病気に罹りやすい。というのも、彼女たちは不安を感じても、何ら抵抗することなく、いろんなことに不満を抱き、判断力が鈍り、身体は丈夫なのだが、激しい感情の餌食となり、その多くは情緒不安定となるからである。メルカド曰く、「老処女、不妊女性、寡婦の多くは憂鬱症である」。私が可哀想に思うのは、結婚することにより治癒可能な女性ではなく、強い気質と生まれつきの性質のため、体液の内なる急流に激しく攫われてしまう女性たちであり、彼女たちは(この病気の乙女の多くがそうであるように)、謙虚で、真面目で、信仰深く、高潔で、才能豊かなのだが、この病気に抗うことができず、激しく苦しみ始めて、この病気に陥り、症状が明白に出るようになると、なす術がなくなってしまう。私は何を語っているのだろう。何という主題に首を突っ込んでしまったのだろう。修道女や少女や処女や寡婦が、私と何の関係があるというのだろうか。私自身、結婚もせず、大学で修道院のような生活を送っているではないか。こんなことを語るなんて、私は全くもって愚か者だ。品位を欠いたと告白せざるを得ない。ユピテルがたまたま、愛の行為について語ったとき、面前にいた乙女パラスが頬を染め、顔を背けたというが、それと似たようなことをしてしまった。気を引き締めよう。扱う主題のため必要なこともあるだろうが、今後は一切、そういったことには触れない所存である。

しかしながら、語るべきことはまだあり、もう少し続けたい。ただ、これからお幾つか付言するのは、ひとえに乙女たちと寡婦たちのためであり、この病に苦しむ人たちを思っただけであり、彼女たちの状況を憐れんでのことである。この病気に苦しみ、その治療が見込めない女性の不幸については気の毒としか言いようがない。ゆえに、私としては、原因を述べるのは中断し、彼女たちに対し間違った考えを抱く人々を非難せざるを得ない。また同様に激しく糾弾しなければならぬのは、世話人面する冷酷漢、(修道女に性急な誓願をさせる)迷信まみれの修道会、無情な親、冷酷な守護者、人倫にもとる(ので、とてもそうは呼べない)友人や仲間といった軽率で愚かな監督者たちである。彼らは自分たちの庇護のもとにある哀れな女性たちがこの病気に苦しみ、涙や溜息や呻き声を出すのを容赦なく拒絶し、頑なに無視し、不遜にも軽蔑する。その際、彼らは良心の呵責や憐れみを一切感じず、ただただ人々から尊敬されたいという思い、自らの欲望、怠慢ゆえの責任放棄、あるいは個人的理由から、彼女たちに辛くあたる(その間、自分たちはよろしくやっている)。カトリック修道院で性急になされる迷信的誓願のなんと忌まわしくおぞましいことか。その誓願により男性も女性も純潔に縛られ、独身生活を強要されるのだが、それは自然の法にもとり、宗教、政治、人倫に反することである。男女の交わりは、生まれながらに備わることであり、人はその方向に、時として激しく傾き、執拗に流され、突進することもあり、抗いがたく定められている。修道生活を行う人々は、厳格な規則、厳しい法、虚しき信念

により、その道を断たれることで、餓えさせられ、暴力を振るわれ、若き活力を抑圧され、魂の健康、身体と精神の良好な状態を損なうことになるのである。同様におぞましいのは、自分たちの信じるお粗末な迷信を振りかざし、私腹を肥やし、自分たちの領域を豊かにしようとする卑劣で独りよがりな輩である。彼らは、世に乞食が溢れず、自分たちの教区に孤児が増えぬようにと、気に食わぬ婚姻の邪魔立てをするのだが、それは誤った考えである。愚かなる策士たること甚だし。こんな恥ずべきことがなされていていいのか。パウロも言うように、もし自らを制することができないのであれば、胸を焦がすよりも結婚する方がいい。隣の家が火事ならば、なんとかして、その火を消そうとするだろう。しかし、痛ましいほどの炎を上げる欲情という火事に関しては気づかない。その火事により、肉体と血液、そしてときとして腸までもが燃え上がり、荒れ狂うのだが、その炎は目には映らない。アウグスティヌス曰く、「自分自身を憐れむことができないのは惨めである」。そして、社会全体の公益、また結果的に彼らの財産も損なわれることになる。というのも、この強いられた気質のために、男性にも女性にもこれほど恐ろしい病気、致命的な病気が降りかかり、不都合な酷い事態を惹き起こすということに考えを巡らせてほしい。この病気によって、厄介なことに、もっと酷いことが起こるのがわかるだろう。尼僧院で頻繁に行われる墮胎や幼児殺し（これに関してはケムニッツ等を参照）、悪名高い姦淫事件が起き、男娼、女性同性愛者、踊り子等があふれ、強姦や近親相姦や姦通が行われ、自慰、肛門性交に耽る者たちが増え、修道僧や托鉢修道士の間でも男色が横行する。これについては、ベイルの尼僧院訪問、メルクリアーレ、ロドリゴ・デ・カストロ、ピータ・ヴァン・フォレスト等、様々な医者の見解を参照のこと。こういった悪徳に対して謝罪や言い訳が広く行われていることを知ってはいる。しかし、この手のことは政治家、医者、神学者たちに任せておこう。私としては、より適切な機会が訪れるまでは、論じるのはやめにしたい。

僕が擁護しているのは、特定の寡婦や乙女なのではないかと
君が勘ぐるといけないから、これ以上は、言葉を紡ぐのはよそう。

第3節 第1項

これら先行症状を惹き起こす直近因。

これらの症状に苦しむ憂鬱症患者にある程度の喜びを与えようと思えば、その症状の出どころである原因をきちんと示すのが効果的で、私見では、これに勝る方法はない。つまり、症状の原因が、多くの患者が思っているような悪魔や魔法のせいではなく、また神に見棄てられ、神の声を聞いたり、その姿を見たりしたせいでもなく、彼らの体内に生まれつきあることが要因であることを悟らせるのである。そうすれば、患者はその症状を上手く避けることができるかもしれないし、少なくとも、より根気強く耐え忍ぶことができるかもしれない。もっとも深刻でよく見ら

れる症状は恐怖と悲しみであり、賢明で分別ある人々にさえ理由もなく訪れ、この病気に罹れば、この症状は避けられない。なぜそうなるかについては、アエティオス（『テトラビプロス』2.2）が第一の問題で、ガレノス（2巻『症状の原因』1）を典拠に詳細に論じている。というのも、ガレノスはすべての原因を黒くて冷たい体液のせいに行っているからである。ガレノスによると、黒い体液から立ち上る暗く曇った粗雑な噴霧によって、精気が陰り、脳の物質も暗く曇り、そうなるとあらゆる物体が恐ろしく見え、精神自体もつねに、暗がりや恐怖と悲しみの中に置かれる。さまざまな恐ろしい伝説上の怪物が、幾千もの形をとって現れたり、霊として姿を現すのだが、このとき、患者は激しい感情に襲われ、このために脳と想像力に異常をきたし、上手く働かなくなる。フラカストロ（『思惟について』2巻）は「冷たい体液を恐怖と悲しみの原因とする。というのも、体液の冷たい人は、歓楽に向かず、鈍重で、生まれつき孤独を好み、寡黙だからである。しかし、医者たちが主張するように、全ての患者が内なる暗闇に向かっているわけではない。憂鬱症患者の多くは、わざわざ暗闇の中に出ていき、そこに留まったり、歩いたりし、暗闇に喜びを見出すのだから。臆病なのは体液の冷たい人だけである」。体液が熱ければ、陽気となり、さらに熱くなると、狂人のように猛り狂い、恐怖を感じることはない。しかし、この説明には間違いがある。もしこれが本当だとすれば、胆汁の焦げ付きによる憂鬱症患者が恐怖を感じることを説明できない。アウェロエスはガレノスの挙げる原因を馬鹿にし、それを反駁するために五つの主張を行う。エルコレ・サッソーニア（『憂鬱症研究』3）も同様に反駁し、別の原因を挙げているのだが、これについてはエリアーオ・モンタルト（5, 6）、ルイス・メルカド（『体内疾患の治療』1.17）、アルトマーレ（7章「憂鬱症について」）、グアイネリオ（「論攷」15.1）、ブライト（37）、デュ・ローラン（5）、デ・ヴァレス（『医学・哲学論争』5.1）が紙幅を費やして酷評し、論駁している。彼らによると、「心身の不調により、黒い体液が生じ、その黒さにより精気が陰り、その陰った精気により恐怖と悲しみは生じる」。デュ・ローラン（13）は、こういった黒い煙霧によって、特に横隔膜が害され、その結果、精神も、太陽が雲によって陰るように陰り、害されると考える。ガレノスの「外なる影が少年を陰らせるように、内なる影は魂を陰らせる」という見解については、ギリシア、アラブ、新旧ローマのほとんどすべての作家たちが同意する。子供が闇の中で怯えるように、憂鬱症の人は始終怯えている。というのも原因は体内にあり、いつもそれを持ち歩いているからである。この黒い蒸気の出どころは、イエズス会士トマス・ライトが精神の情念論で主張するように心臓の周りの黒い血液かもしれず、胃や脾臓や横隔膜かもしれず、異常をきたした部位すべてかもしれないが、それは重要ではない。いずれにしても、この蒸気は精神を永遠の地下牢に押し込め、恐怖、不安、悲しみなどによってつねに押し潰そうとするのである。健康な人は、元気なく無気力な状態など、憂鬱症の症状を笑い飛ばし、馬鹿にして楽しむ。その気になれば、そんなつまらない些細なことは、簡単に我慢したり抵抗できたりするはずではないか、と。しかし、そんな風に思う人でも、たとえば、突然、自分の特別な友人が死んだと告げられたらどうなるだろうか。悲しみに暮れるに違いない。あるいは、すぐにでも落ちてしまいたいような険しい岩の上に置かれても、平気でいられるだろうか。心臓は恐怖で震え、頭はく

らむだろう。ピエトロ・ピエロ（『疫病論』）が挙げる例についてはすでに触れたが、その例について彼は以下のように考察する。「板の上を歩く人は、それが地面に置いてあれば、何の問題もなく歩くことができるが、その板が橋の代わりに深い水の上にかけてあると、激しく動揺する。これは想像力の働きに過ぎないのだが、落ちるかもしれないという思いに押しつぶされ、他の器官と機能が屈してしまうのである」と。確かにその通りなのだが、この場合は、恐れるに足るべき正当な理由、恐怖を惹き起こす対象が本当に存在していると考えられることができる。これと同じように、憂鬱症患者の場合は、内なる理由、すなわち永続する煙霧と暗闇が存在し、恐怖や悲しみや疑念を惹き起こす。しかも、その対象は取り除くことができず、つねにつき纏い、肉体に伴う影のように不可分なのである——自分の影を追い払い、置き去りにできる人などいるだろうか。憂鬱病患者に対しては、肝臓の熱、胃の冷え、脾臓の弱体を改善し、焦げた体液とそこから生じる蒸気、心臓から生じる黒い血液を除外し、体外に症状として出るすべての乱れを取り除くよう指示するしかない。つまり、彼らには、原因となるものを除去することではじめて、悲しんだり、恐れたりしないよう、あるいは鈍重であることをやめるよう、命じることができる。さもなければ、どんな診察もほとんど役に立たない。それでは、瘡に罹った人に乾燥するのをやめるよう、あるいは、怪我をした人に痛みを感じないように命じるとの同じである。

疑念は、恐怖と悲しみと同じ泉から生じ、その後すぐに続く。それゆえフラカストロは「恐怖は疑念の原因であり、彼らはつねに自分に対する裏切りや、陰謀が企てられていると疑い」、いつも怪しんでいると述べる。不安も同じ泉から生じる。さまざまな煙霧によって、彼らの好き嫌いは烈しくなる。彼らは孤独を好み、光を避けるので、人生に倦み、この世を嫌うのだが、これも原因は同じである。というのも、彼らの精気と体液は光と対峙し、恐怖のために、人との交わりを避け、引籠ってしまうからである。彼らはつねに不安を抱き、邪険にされたり、邪魔者扱いされたり、場違いな言動をしてしまうのではないかと恐れている。彼らは鼓腸が原因で、性交に耽りがちである。胆汁の量が増えるので、怒りっぽく、気難しく、つねにいらいらしており、そのために、彼らは恐ろしい夢を見、寝ても覚めても、激しく暴れることがある。また、自分には頭がないとか、自分は空を飛んでいるとか、水に沈んでいるとか考えたり、自分の身体が陶器やガラスなどでできていると信じたり、頭の中にガスがたまっていると思ひ込んだりする。エルコレ・サッソーニアは、この原因を動物精気のいくつかの動き、すなわち「膨張、収縮、混乱、変化、翳り、異常な温度上昇や低下」に帰し、実体を伴う体液を原因から除外する。フラカストロは「彼らが誤った考えに取り憑かれる原因は、研究に値する事例と説明する。自分には角が生えているとか、自分の鼻は巨大だとか、自分は鳥や獣だとか、どうしてそんなことを考えるのか。自分は国王であるとか、貴族であるとか、枢機卿であるとか、どうして彼らは、こんな偽りを信じてしまうのか。フラカストロはまず、二つの理由を提示する。「原因の一つは身体的気質によるものであり、もう一つは空想がきっかけとなるものである」。たとえば、体液が冷たくなったり、粘液が分泌されることで、目が見えなくなったり、耳鳴りがするようなものである。二つ目の原

因に関しては、デュ・ローランが述べるように、想像力は内的、あるいは外的な刺激を受けると、その情念に沿うように、あるいは逆にそれに反するように、誘惑を悟性に示す。すると、その後強烈な愉悦が生じ、そうなる、その愉悦に魅了され、意志と理性は虜になってしまう。

学者と恋人たちに憂鬱症と狂気の症状が多く見られることについては、コインブラの哲学者が以下のように説明する。「彼らは自分が患う対象について、激しく持続的に思いを寄せるので、精气とそれに伴う熱が脳に昇り、脳が過剰に炎症を起こす。すると、内的感覚器官の細胞は、常温を保つことができず、そうなる、本来の機能を果たすことができなくなるからだ」。

憂鬱症の人が知的であることについては、アリストテレスがその問題集で取り上げて以来、長きにわたって論じられてきている。教養のある人物、有名な哲学者や律法者たちが「例外なく、ほとんどすべて憂鬱症であること」は、さかんな論争を巻き起こしてきた問題である。ヤーソン・ファン・デ・フェルデはこれを生来の黒胆汁のせいだと考え、メラニトロンもその著『魂について』で、同じ見解に傾いている。マルシリオ・フィチーノ（『研究者の健康維持』1.5）はそんなに単純ではないと主張する。というのも、生来の黒胆汁は、冷たく乾燥している、それによって人は、愚鈍になったり、馬鹿になったり、臆病で孤独を好むようになるからである。そうではなく、生来の黒胆汁が、粘液を除く他の体液と混じり合った結果であるというのがフィチーノの見解である。その混合液は焦げておらず、血液が半分を占める形で混合している。ゆえに焦げつきがまったくと言っていいほど見られず、熱すぎることもないし、冷たすぎることもない。メラニトロンが紹介するピエトロ・ダバノの見解によると、この現象は、焦げた黒胆汁から生じるものとされ、生来の黒胆汁は冷たすぎるとして除外される。しかし、デュ・ローランはこの見解を厳しく非難する。というのも、石灰に水をかけると燃えるように、体液が焦げると、人は狂気に陥るからである。だが、生来の黒胆汁は血液と混合し、ある程度は焦げているに違いないのである。というのも、アリストテレスの古い警句にあるように、「優れた知性には、必ず狂気が含まれている」からである。フラカストロの見解が、この論争に終止符を打ってくれるだろう。「粘液質の人は鈍重で、多血質の人は快活で元気、人に好かれて陽気だが、知的ではない。胆汁質の人は、動きが機敏で、怒りっぽく、考えるのが嫌いで、その考えは信用ならない。黒胆汁質の人の多くはすぐれた知性の持ち主だが、全員がそうとは限らない。この体液は熱いことも冷たいこともあり、薄いことも濃いこともあるからである。これが熱すぎると、怒りっぽく狂気になる。冷たすぎると愚鈍で、臆病で、陰鬱となる。冷たくならず、熱を少し帯びる形で中庸が保たれていれば、すぐれた知性となる」。フラカストロのこの文章は、体液が少し乾いていれば賢明な精神となり、すぐれた知性になるための主要因は、適度な熱と乾が保たれていることである、というヘラクリトスの言葉と一致する。これを受け、象は、脳が最も乾燥し、黒胆汁の量が多いので、野獣の中で知性が最もすぐれている、とアエリアヌスは述べる。カルダーノ（『精妙さについて』12）もこの見解に同意する。この問題については、ミラノの医師ジョヴァンニ・バプティスカ・

シルヴァティコが、その第一論争の中で、大きく取り上げている。またルーラントの『問題集』、チェリオ・リッチェリ（17巻）、ヴェレリオラ（『医学物語集』6巻）、エルコレ・サツソーニア（『憂鬱症の研究』3）、ルイス・メルカド（『心の病の治療法』17）、バティスタ・デッラ・ポルタ（『観相学』1.13）など多数、参照されたい。

泣いたり、ため息をついたり、笑ったり、痒がったり、震えたり、発汗したり、顔を赤らめたり、ありもしないものが聞こえたり見えたり、鼓腸になったり、消化不良になったりするものは、すべて身体的症状ではあるが、これらは、まずその前に心の乱れがあって惹き起こされるものである。スカリジェが主張するように、涙は感情ではなく、身体的運動なのである。「怖がる人の声が震えるのは、その心臓が揺れているからである」（『コインブラ大学版アリストテレス註解』6.3）。話をするとき、よく吃ったり、口籠ったりする理由についても、ヒポクラテスを典拠にメルクリアーレとモンタルト（17）が「乾燥することで、舌の神経が鈍感になるから」と同様の説明をしている。一部の人に見られる早口という症状は、アエティオス曰く、「ガスがたまり、想像力が迅速になることにより」生じる。「乾燥が行き過ぎると禿げ頭になる」が、毛深さも体液の乾燥から生じている。脳が乾燥して眠れず、始終冥想し、心満たされず、恐怖と心配ゆえに心が安らぐことなく、自制がきかなくなったりするのは、鼓腸と肝臓が熱くなることが原因である（ダ・モンテ『診察』26）。腹鳴は鼓腸が原因であり、鼓腸は、消化混合が不良であったり、生まれつき熱が不足していたり、熱くなりすぎたり、冷たくなりすぎたりすることによって生じる。心臓の動悸は蒸気から生じ、心臓が重苦しく痛むのも原因は同じである。腹部が硬くなるのは、鼓腸が原因であり、身体中が痙攣するのも同じ理由である。まるで蚤か蟻にでも噛まれたかのように、顔が赤くなったり、痒くなったりするのは、刺すような痛みを伴う軽度の鼓腸が原因である。冷や汗の原因は、下肋部から生じる蒸気であり、その蒸気が皮膚を刺激するのである。瘦身は栄養不足が原因である。これとは逆の異様な食欲についてはアエティオスが説明している。これは「腸の入口が冷たくなる」のが原因である。内臓が冷たくなり、腹部も冷え、それでいて肝臓が熱い場合、消化不良が生じ、その乱れから緊張を強いられる。この場合、我々の魂は、精気が欠如しているため、多くの緊張を強いられることに精魂尽き果て、上手く対処できず、感情に流されてしまい、その食欲を止める理由が考えられなくなってしまうのである。

羞恥と赤面は、人間特有の感情であり、恥辱や屈辱によって惹き起こされる。あるいは何かよからぬことをしてしまい、その罪の意識が原因となることもある。さらに、フラカストロが断定するように、「自分の欠点や恐怖心から生じることもある。自分の欠点を知る人が目の前にいると、顔が歪み、すると身体はそれを止めようとして、顔の方に熱を送る。そして熱は細かい血液を引きつけ、我々は赤面するのである。大胆で傲慢で無頓着な人は、まったくと言っていいほど赤面しないのだが、怖がりの人は赤面する」。アントニオ・ルイスは赤面についての本で、顔面に細かい血液が上がってくるのは、目の前に自分よりも優れた人がいて、その人に対する敬意の気持が

原因というよりは、「喜びとか愉悅の感情が原因であり、あるいは、まったく予期していないときに、突然の出来事や出会いが訪れたりした場合に生じる」と論じ、これについては、マクロビウスが引用するディサリウスも同意見である。また、聞いたり見たりする物体は、何であれ、赤面の原因となる。というのも、ダンディーニが論じる通り、目の見えない人は、決して赤面することはないし、夜と闇で何も見えなくなると、人はすべからず恥知らずになるからである。自分より優れた人の前や、嫌いな人がいる場所で叱責されたり、何かに悩まされ、不快な気持ちが続いたりすると、赤面は赤面症、すなわち、一瞬の赤らみが、持続する赤に変化する。耳の先端がちくちくして、耳だけが赤くなる場合もあれば、顔一面が赤くなる場合もある。ルイスが主張するように、「何も間違ったことをしたわけでもなくとも」である。確かにアリストテレスは「赤面はすべて自分の過ちから生じる」という見解だが、実際は、そうでない場合もある。ダンディーニが主張するように、赤面は、過ちだけでなく、恐怖や暴力、あるいは経験不足から生じることもある。肝臓が熱くなることで生じる場合もあれば、デュレ（ウリエ参照）曰く、「脳の熱、鼓腸、肺の熱が原因となる場合もあれば、ワインや強い酒を飲み過ぎた後や、困惑した後に生じる場合もある」。

笑いとは何であるかについて、キケロは言う、「笑いがどのようにどこで、しかも止めたいと思っても止められないほど突然生じるのか、我々の顔や血管や目や表情や口や脇腹が笑いによってどう乱されるのか、これについてはデモクリトスに任せておけばいい」。憂鬱症患者に笑う人が多いのは何故かについては、ゴメス（『塩について』3. 18）が説明している。これは特に多血性憂鬱症の場合に顕著なのだが、まず、心地よい蒸気が大量に心臓からあふれ、「身体を横切り、神経の多い横隔膜をくすぐる。それにより、感覚が刺激され、動脈は拡散、拡張し、そこから生じる精気が脇腹や静脈や表情や目に宿り、動かすのである」。詳細はジョッシオ（『笑いと嘆き』）とビベス（3巻『霊魂について』）を参照。涙は、スカリジェが定義するように、悲しみと憐れみから生じる場合と「湿った脳が熱することで生じる場合とがある。体液が乾いた人は泣くことができないのである」。

憂鬱症患者が頻繁に幻や化け物を見、彼らに幻聴や幻視の症状が多い点については、フェイアンスが想像力論の中で詳しく論じているし、ラーヴァータ（『亡霊論』1. 2, 3, 4）も参考になる。空想力が腐敗すると、実際にはありもしないものが、見えたり聞こえたりするようになる。ゆえに、憂鬱症患者や病人には、幻視者が多いのだが、同様に断食をやり過ぎる人、夜眠れない人にも同様の症状が見られ、また弱視の人、生まれつき臆病な人、狂っている人、錯乱した人、さらには熱心な求道者にもこの症状は見られる。諺のサビニ人の如く、彼らは自分たちが欲するものを夢見る。マゼラン海峡とその近辺領域を発見するべく派遣されたスペイン人サルミエントは、ある丘の頂上へとペルー太守に連れていかれた。「彼の目に見えたのは、その丘の下に広がる美しい平原、壮大な建築物、たくさんの暮らし、高い塔、素晴らしい寺院」、まるでヨーロッパと見紛うほどの華やかな街並みだったのだが、ラエトによると、そんなものは実際には存在しなかつ

た。サルミエントは「甚だしく愚かで、何でも信じてしまう」性格だったので、そのとき自分が見たいと思っていたものが、彼の目に見えたというわけである。あるいは、ルイス・メルカドの説明によると、実際には存在しないさまざまなものが見えたり、感じられたりするの、血液や胆汁などから、体内に蒸気や湿気が生じ、それらがさまざまに混ざり合うからである。酒を飲むと、それが脳を巡る間、世界が回転しているように思える。ちょうどこれと同じように、幻が見える人たちの場合も、その悪しき原因は体内にある。ガレノスが言うように、狂人や瀕死の人が「外部に見えると思っているものは、彼らの瞳の中にある」。目の前に見えているように思えるものは、実は脳の中にあり、脳が一種の凹レンズとなって物体を映し出すのである。ポワサル曰く「衰弱した老人の脳は、虚ろで乾燥しており、そのために、ありもしないものを見るようになる」。この場合、間違いがひどくなり、毫碌してしまうこともある。あるいは、赤いガラスの破片を通してみると、すべてが赤く見える。それと同じように、体内の腐敗した蒸気は頭に上り、さらにそこから蒸留されて目に達する。するとその蒸気が、目に映るものを受け取る水晶体と混じり合う。これにより、あらゆるものがその蒸気と同じ色に見える。蒸気の中には、もとの体液の色が残っており、その色が視界全体に広がるので、たとえば憂鬱症の人には、すべてが黒く、粘液質の人にはすべてが白く見える。そうでなければ、既に述べたレメンズ（1.16）の優れた説明にあるように、腐敗した空想により腐敗した器官は「精気と体液の激しい攪乱を惹き起こす。そして、かき乱された精気と体液は脳のすべての皺をあらゆる方向に行き来するので、それが原因となり、目の前に幻影が生じるのである」。古のピタゴラスがそうだったと言われるように、月に書かれたものが読めると思っている人、硫黄の臭いがしたり、ケルベロスの鳴き声が聞こえると思う人もいる。狂気に陥ったオレステスには、復讐の女神たちが自分を苛み、殺したはずの母親が、つねに自分を襲おうとする姿が見えていた。

母上、後生ですから、私に嫉めないでください。

蛇のような恐ろしい顔をした復讐の女神たちを。

ほら、今まさに、女神たちが私を襲い、飛びかかってくる。

しかし、このように狂気の発作で世迷言を言う弟に向かい、エレクトラは、そんなものは見えはしない、狂った想像力の産物にすぎない、と告げる。

哀れなオレステス、ベッドでお休みなさい。お前が

見えると言うものは、単なる幻にすぎません。

同様にエウリピデスの『バコスの信女』に出てくるベンテウスには、太陽が二つ見え、テーベも二つ見えているのだが、これも彼の脳がおかしくなっているだけの話である。また、こういった幻の原因が、病気であることもよくあることである。カルダーノ（『精妙さについて』18）曰く、

「心が働きすぎて渴き、断食によって壊れ、幻が見えたり、幻聴が聞こえたりする」こともある。オジアンダは不思議な幻を見たというし、アレッサンドロ・ダレッサンドロは幻を見るだけでなく、幻聴も聞こえたというが、ともに病気のときの話である、とカルダーノは『事物の多様性について』(8.44)で述べている。かの高名なアラブ人アルバテグニウスは死の床にあって、空を上り下りする船を見たというし、フラカストロも、瀕死の友人バプティスタ・トゥッリアヌスが見た幻について記録している。視力が弱かったり、変なことを言われたりしても、同じようなことが起こるし、他の原因が共起することもある。たとえば、水の中の櫂は屈折を起こし、大きく見えたり、折れ曲がって二本に見えたりする。空気が濃くても同じような結果を惹き起こすし、暗闇の中でよくわからないものは、恐怖と空想によって、幽霊や悪魔に見えたりする。「衰れな連中は、烈しく恐れるものを、簡単に信じてしまう」。マルチェッロ・ドナーティ(2.1)が紹介しているアリストテレスの例によると、アンテパロンという人物は、どこにいても、まるで鏡に映ったかのような自分の姿が、空中に見えたという。ウイテロ(10巻『遠近法について』)にもこれと似た例が挙がっている。彼がよく知る人物の話だが、その人は三四日眠れない夜が続いた後、川の横を馬に乗って走っていると、もう一人の自分が馬に乗り、自分と同じようなしぐさをしているのが見えたが、光がどんどん射してくると、もう一人の自分は消えてしまったという。しばしば隠者や世捨て人は、過度な断食や粗食が原因で、こういった馬鹿げた幻や啓示を見る。スコットが『魔術の暴露』で示したように、手品によって騙される人は多い。またカルダーノ(『精妙さについて』18)によると、お香や香水や燻蒸、動物の排泄物を混ぜた蠟燭、遠眼鏡などに惑わされる人も多い。こういった自然現象で、人が死んでいるように見えたり、頭が馬に見えたり、牛の角が生えているように見えたり、獣のような姿に見えたりする。また、部屋の中に蛇や蝮が群れているように見えたり、部屋が暗くなったり、明るくなったり、緑や赤やさまざまな色に見えたりもするが、これについてはバティスタ・デッラ・ポルタ、ピエモンテのアレッシオ、アルベルトゥス等を参照されたい。蛍や火竜、流星やプリニウス(2.37)がカストルとポリュデウケスと呼ぶ鬼火は、湿地や教会墓地、湿潤な谷や戦争が行われた場所でよく見られるが、その原因については、ゲッケルやベルンハルディやフィンク等が詳しい。また爆竹や朽木を使ったり、死んだふりをしたり、大きく見せたり、小さく見せたり、綺麗に見せたり、汚く見せたりして、子供を驚かせることはよくある。アルベルトゥス曰く、「見物人たちが首なしに見えたり、火だるまに見えたり、悪魔の姿に見えたりするよう、黒犬の毛を持ってこい」。反射光によって、不思議で見慣れない光景が見えるのもよくあることである。誰もが知るように、暗い部屋の中に、ただ小さな穴から光が入るようにし、その穴に紙かガラスをあてると、太陽が輝いている間、反対側に太陽光の照らし出す物体が映し出される。凹レンズか円筒レンズを使えば、手品師たちが愚かな聴衆を暗い部屋に入れて騙すように、人間や悪魔や怪物のどんな姿でも映し出すことができる。アグリッパが示すように、別の部屋に恐ろしい像を置いておくだけで、我々は、自由自在に姿を変え、空中に姿を出現させることもできるのである。かつてロジャ・ベイコンは、この術を使って、空中に自分の歩く姿を映し出したと言われるが、彼の『遠近法』には、そのようなこと

は書いていない。しかし、大抵の場合、この種の幻は、脳が作り出すものであり、脳に欺かれているのである。ただし、悪魔が誑かす場合があることも否定はしない。悪魔は憂鬱症や類似の病の患者に対し、ありもしないものを暗示したり、明示したりする機会をうかがっているのである。さらにこれらの原因に、ロジャ・ベイコンが『術と自然のはたらきの秘密』1章で言及する、軽業師や悪魔祓いや弥撒司祭やペテン師の騙しの技を付け加えることができるかもしれない。彼らはあらゆる鳥や獣の声、さらに他人の声質や話し方を真似ることができる。また喉の奥で声を出すことで、そうするとまるで遠くから声が聞こえてくるような感じがするので、聞いている人は霊の声が聞こえると信じてしまい、そのことに驚き、恐怖する。これに加えて、イギリスのグロスタ大聖堂の囁きの場や、イタリアのマントヴァ公爵の館などのように、告解を盗み聞きするための人工的装置があり、そこでは凹型の壁によって音が反響するようになっている。この仕組みについては、ビアンカーニが「音響測定」の中で数学的に示している。

視覚だけでなく、聴覚もしばしば騙されるが、その理由はほとんど同じである。鐘の音が聞こえる人は、好きな時に鳴らすことができる。「阿呆が考えるだけ、鐘が鳴る」。ガレノスが紹介するテオピリウスという人物は、音楽が聞こえると思っていたが、それは蒸気のために耳鳴りがするのが原因であった。木魂に騙される人もいれば、海鳴りに騙される人、九天井や地面の洞や空ろな建物における反響に騙される人もいる。アキテーヌ地方のカオールという場所では、奇妙な木魂によって、言葉や文章、あるいは楽器の演奏が、完全に繰り返され、しかも、もとの音よりも大きく、くっきりと聞こえる。プリニウス (36. 15) が記すように、マケドニアのオリュンポス山では、言葉を発すると木魂によって7度繰り返され、フランスのバリ近郊の村シャラントンの木魂は12回続くという。ギリシアのデルポイ神殿は、驚異的な木魂がするところとして有名だが、これと似た場所は他にも多い。カルダーノ (『軽妙さについて』18) には、こういった木魂によって惑わされた人々についての不思議な話が載っている。イエズス会士ビアンカーニは「音響測定」でさまざまな例を挙げ、こういった反響の仕組みを、実証によって、心ゆくまで説明している。セヴァーン河口にあるバリ島では、鍛冶場の音が聞こえるというが、これについては、シチリアのリパリ島や、硫黄質の島々でも同様であり、オラウスが語るところによると、スカンジナビアなど北方の国々の内奥地でも聞こえるという。カルダーノ (『事物の多様性について』15. 84) が取り上げる女性は、ミラノの画家の妻なのだが、悪魔が呼ぶのが聞こえるような気がするという。またこういった幻視と幻聴の例は、数多く挙げてあるが、大抵は、想像力の腐敗によって生じると説明される。

憂鬱症患者が預言し、いくつも言語を話し、天文学や知る由もないような学問を語ることに付いては、それがどういう風に起こるのか、すでに簡単に述べたので、ここでは、いくつかの見解を追記するに留めたい。アルコールニヤボダン (『悪魔憑き』3. 6) 等は、この症状を、彼らが悪魔に憑かれている明白な証として考える。エルコレ・サッソーニアとアバノのピエトロも同様に

考え、彼らを治すことができるのは司祭だけだと言う。しかしながら、グアイネリオ、モンタルト、パドヴァのポンポナッツィ、レメンス（2.2）は、こういった症状は浄化によって治すことができるとするアリストテレス（『問題集』30.1）を典拠に、その原因は、すべて体液の悪化にあると論じる。ちょうど火打石を打つと火花が散るように、精気の動きが活発になることで、彼らは「見知らぬ言葉を口に出す」。レメンスはプラトンの回想の議論から、また別の説明をしているが、これは、マルシリオ・フィチーノが、友人のピエトロ・レオーネについて書いていることと同じである。レオーネは、ある種の神懸りな状態になって、自然の神秘を解し、ギリシアと異教徒の哲学者の主張を、その作品を見聞したり、読んだりする前に理解したという。しかしながら、この点について私は、アウイケンナとその流派の見解と同じであり、こういった症状は、悪しき精気から生じると考える。悪しき精気は、必ずと言って体液の腐敗に乗じ、そうでなければ、魂を攪乱するからである。しかも、体液それ自体が、「悪魔の風呂」となるので、アグリッパが証明するように、悪魔を誘い、憑かせやすくする。

第4章 第1節 第1項 憂鬱症の前兆。

前兆、すなわち、これから起こることの兆には、良いものもあれば、悪いものもある。この病気が遺伝によるものではなく、「発症したばかりであれば、治療は難しくない」とアウイケンナ（3.1.4.18）は言う。特に笑いを伴う憂鬱症の場合は、安全で穏健で、進行も遅い（エルコレ・サッソーニア）。「憂鬱症の人に、痔核や、水腫とも呼ばれる静脈瘤が生じ、そこから血液が排出されると、苦しみはなくなる」とヒポクラテス（『警句集』6.11）は言い、ガレノス（『世俗の病』6.8）も同意見である。このヒポクラテスの警句に対しては、アラブと新旧ローマの作家たちがすべて同意している（モンタルト（25）、エルコレ・サッソーニア、メルクリアーレ、ベネデット・ヴィットーリ等）。シェンク（『奇病大全』1巻「狂気について」）は、この警句の例証として、ダニエル・フェデラという銅細工師の話を紹介する。この人物は、長い間、憂鬱症を患い、27歳のとき、とうとう発狂したのだが、腿に静脈瘤ができはじめ、それとともに狂気から解放されたという。ローマの将軍マリウスも、大きな苦痛を伴ったが、同様に治療したという。シェンクには、月経が何か月も滞り、それが排出されることによって、病気が治ったという女性の例がいくつか挙げられている。男性の場合、痔核が出血することによって同様の効果が見られる。この見解については、すべての医者が声を揃えているのだが、無理やりではなく、自然に出血するのを待たなければならないと主張する人もいる。四日熱に罹ると、あらゆる憂鬱症が快方に向かう。ジュベール曰く、この熱病に二度罹る人はほとんどいない。しかし、四日熱によってこの病気が治るという見解には、疑問が残る。というのも、医者の中には、長い熱病、特に四日熱を憂鬱症の特別因として挙げる者が多いからである。ラーゼス（『大全』1.9）には次のようにある。「憂鬱症患者が皮

膚病になって恢復したり、疥癬や癩や鱗症の発症が止まったり、便秘や尿路閉塞後の排泄があったり、脾臓が肥大化したり、静脈瘤が現れたりすると、憂鬱症は治癒する」。グアイネリオ (5.15) は、疥癬や鱗症の発症に加えて、水腫症、黄疸、赤痢、癩病を良き兆候として挙げ、ヒポクラテスの『警句集』(6) を典拠にこれを証明する。

これに対して悪しき前兆もある。憂鬱症が慢性化している場合、諺にあるように、いわば習性になっており、治療不可能である。あるいは、治療に最善を尽くす人々の言にあるように、「治療は極めて難しい」。これについて、ガレノス(『患部について』3.6) は「どんな患者であろうと、原因が何であろうと、一旦、慢性化してしまうと、憂鬱症は長引き、根強く、執拗に続き、治療が難しい」と述べる。ルキアノスは痛風を「病の無慈悲な女王」と形容したが、この言葉は、憂鬱症にも当て嵌まる。しかし、パラケルススは、いかなる病も治療可能だとし、たとえば彼に反論するエラストゥス(3) のように、そうでないと考える人たちを笑い飛ばす——ただ、別のところで彼は、遺伝による病を治療不可能とし、いかなる施術によっても取り除くことはできないと論じている。ヒルデスハイム(『拾遺集』2.「憂鬱症について」) は、「理性ではなく想像力だけに支障をきたす場合」、危害は少ないと論じ、「最も穏当なのは、血液から生じる場合であり、焦げた胆汁から生じると悪性度が増し、最もひどいのは、黒胆汁の腐敗から生じる場合である」と言う。ブルエレはガレノスに反し、下肋骨憂鬱症がもっとも危険が少なく、他の二種の憂鬱症は治療困難であると考え。治療は男性の場合も困難だが、女性の場合、より困難である。しかし、男性にしても女性にしても、ダ・モンテ(『診察』230「イタリア修道院長のために」) の以下の言葉には注意しなければならない。「この病は、通例、墓場に入るまでつき纏う。確かに、医者はその症状を軽減することはできるので、しばらくの間、症状が治まることもある。しかしながら、完全に治療することは不可能であり、ちょっとしたきっかけや、過ちによって、さらにひどく激しい症状となってぶり返すのである」。たとえば、メルクリウスの彫像を考えてみるといい。かつて金メッキに覆われていた像は、風雨に曝され、目に見える部分は、メッキがすべて剥がれてしまっているように見える。しかし、裂け目の部分には、金が残っているものである。これと同じように、ひとたび憂鬱症に染まってしまうと、症状が消え、身体がどんなに汚れなく見えたとしても、憂鬱症の痕跡が残り、そう簡単に、根絶することはできない。憂鬱症は悪化すると、癲癇、卒中、痙攣、失明を惹き起こすこともしばしばある。すべての作家たちはヒポクラテスとガレノスを典拠としつつ、こうなるのは黒胆汁が脳髓を支配する場合であると主張する。またフランボワジェールのニコラ・アブラムとサルスティオ・サルヴィアーニは、失明に至るのは、黒胆汁が視神経に達する場合であると追記する。メルクリアーレ(『診察』20) には、憂鬱症から癲癇になり、失明した女性患者の例が載っている。冷たさを原因として生じ、その冷たさが持続したり増したりする場合、癲癇になり、その後、痙攣が起き、失明に至る。そうでなければ、最終的には痴呆で間抜けになり、言動としぐさのすべてがおかしくなる。熱さを原因として生じる場合は、気性が激しく、血気盛んになり、最後には狂気に至る。「熱を帯びた憂鬱症には、

狂気が続く」。この場合よくあるのだが、熱さが続き、激しさを増し、「発作的、あるいは慢性的に狂気となる」。というのも、クラトを典拠にダニエル・ゼネルトが論じるように、この体液の中には、「炎の種」が含まれるからである。また、ダ・モンテによると、生来の黒胆汁が焦げて、それが過剰となって生じる場合は、悪魔憑きになることが多い。

この病気が死に至ることは滅多にないが、もちろん最悪の場合は別で——その場合はあらゆる災厄の中で最大、最悪、最も痛ましい惨状となる——憂鬱症患者は自ら命を絶つことが多く、彼らの間では見慣れた光景である。これはヒポクラテスの見解であり、また「彼らは死を恐れてはいるが、しばしば、自殺するに至る」（『患部について』3.7）とはガレノスの言葉であるが、これは医者全員の見解でもある。またこれは、ラビ・モーゼの警句でもあり、アウイケンナ、ラーゼス、アエティオス、ド・ゴルドン、パラスコン・ドゥ・タラント、アルトマーレ、サルステイオ・サルヴィアーニ、カポディヴァッカ、ルイス・メルカド、エルコレ・サツソーニア、ル・ボワ、ブルエレ、フックス等すべてが、前兆として挙げている。

つねに死の恐怖に怯え、生への、そして
見るべき光への詮なき嫌悪に捕われ、
ついには、苦しむ心に自ら死を与える。

このように憂鬱症患者は、自分の悲惨で辛い状態にひどく苦しむので、人生に喜びを見出せず、その耐え難き苦痛から逃れるためには、ある意味、自殺せざるをえないのである。フラカストロ曰く、彼らは「激しく怒っているが、たいていは絶望し、悲嘆に暮れ、怯えている。そして魂の苦悩と困惑から逃れるため、自殺する。というのも、彼らの人生は不幸で惨めだからである。夜も休まることがなく、眠ることもできず、たとえ微睡むことがあっても、恐ろしい夢を見て驚く」。昼間は、恐ろしい対象につねに怯えており、疑心、恐怖、悲嘆、不満、心配、羞恥、苦悩などによって、心は千々に引き裂かれ、そのさまは、ひと時、いや一瞬たりとも落ち着くことのできない、暴れ馬のようである。考えないようにしようとしても、彼らの心はその恐怖の対象に傾き、いつも、そのことばかりを考えてしまい、忘れることができないので、日夜、魂がすり減らされる。つねに苦しめられ、その試練の苛烈さは、ヨブにも負けないほどで、飲み食いもできず、寝ることさえできない。「悲惨という鉄の鎖に縛られて」（『詩篇』107.10）「彼らの魂は、あらゆる食べ物を嫌うので、死の扉の前まで運ばれる」（『詩篇』107.18）。ヨブとともに、自分の星巡り、そして「自分が生まれた日」を呪い、「死を願う」。というのも、ピネダなど多くの聖書解釈学者によると、ヨブは、絶望するほど、ほとんど狂気に至るほどの憂鬱症であったからである。彼らはしばしば、世の中の不平を言い、その不平の対象は友人、仲間、全人類に及び、そして自分の苦しみの辛さから、神に対してさえ、不平をもらす。「彼らは生きることを望まず、かといって死ぬこともできない」。そして、卑しく、醜く、退屈なこのような日々を送る中で、ついには、

この惨めな人生を癒す慰め、改善策などないことを悟り、死によってすべてから解放されようとする。「あらゆる生き物は、最善を求め」、彼らも最善を求めるのだが、彼らの場合、少なくとも見かけ上は、「死ぬことを善と考え、あるいは、こうすることで、巨大な悪から解放されると思っている」(ヒポクラテス)。彼らは、自らフライパンから火へと飛び移るイソップの魚のようなもので、この手段によって苦しみが軽減することを願う。それゆえ、フェリクス・プラタ曰く、「何日も辛く退屈な日々を過ごした後、入水や首吊りなど恐ろしい手段で」彼らは自殺する。「この種の悼ましい出来事は、日々、よく見られることである」。セネカによると、「ある者は、戸口の前で首を吊り、ある者は主人の怒声を聴きたくないあまり屋根から飛び降り、ある者は逃亡から連れ戻されぬよう、腸に刃物を突き刺した」。自殺の原因はさまざまで、「愛が破滅となることも、怒りが破滅となることもあり」、他にも、悲しみ、狂気、恥辱なども原因となる。自殺はこの病気によく起こる不幸、痛ましい結末であり、憂鬱症患者は、医者たちの審判により、自死を宣告される。彼らは激しく取り乱し、暴君化した意志によって盲滅法あやつられ、惨めさに追い立てられる。こうなると、天の医者である神が、その恩寵と慈悲とでもって助けてくれない限り、なす術はない。というのも、人が何を言っても、何をしても役に立たず、彼らは自分自身の屠殺者となり、自らを処刑する。彼らが手にするのは、ソクラテスの毒薬、ルクレティアの短剣、ティモンの絞首索である。カトーの短刀とネロの剣は、彼らが自殺した後も残ったわけであり、これら自死のための道具は、数多く後世に伝わっている。そして、こういった道具は、この病気に罹った惨めな人々が自殺をするために、使われ続けるのである。彼らの苦しきは、それほどまでに耐えがたく、辛く、激しく、猛烈であり、筆舌に尽くしがたい状態が持続する。しかも、カルダーノが言うように、一日の苦しきは百年に感じられ、また、アレタイオスの至言にある如く、その苦しきは、「人を抹殺するほどの魂の苦しき」である。魂にとっての疫病であり、魂を捻りつぶし、押しつぶすものであり、地獄の縮図である。もし地上に地獄があるとすれば、それは憂鬱症患者の心の中に見出されるはずである。

というのも、苦しみが深すぎて、言葉にできない
 ほどであれば、それはもう地獄なのです。

然り、皮肉屋のルキアノスが痛風のことを冗談めかして言ったことは、憂鬱症の苦しみを表現するのに真面目に当てはまる。

嗚呼、悲しき名、神々に嫌われし者、
 涙を誘う憂鬱症、黄泉の川の娘よ！
 地獄の暗き洞穴で生まれたお前は、
 復讐の女神メガラの子で生を受け、
 その胸に抱かれ、幼くして

アレクトの苦々しい乳を与えられた。
悪鬼たちはこぞって、忌々しいお前を
光のもとへ解き放ち、人々に破滅をもたらした。

そして、この少し後にはこう続く。

ユピテルの雷の矢もこれほど凄まじくなく、
いかなる嵐もこれほど平穏を乱さず、
凄まじいつむじ風の方もこれほどではない。
私は、ケルベロスに激しく噛みつかれたのか、
私の手足は毒蛇の毒に侵されてしまったのか、
私の服は、ネッソスの汚れた血に染まったのか。
この病は、嘆くことも、治すこともできない。

いかなる身体的拷問も、これには及ばず、「シチリアの暴君たちでさえ、これより酷い拷問を思いつかない」。吊るし責め、焼き鑊、パラリスの雄牛もこれほどではない。

神々のいかなる怒りも、いかなる武器も、いかなる敵意も、
一撃で、魂をこれほど深く傷つけることはない。

あらゆる恐怖、悲しみ、疑い、不満、不親切、不快感は、まるで小川のように、このエウリポス海峡、このアイルランド海、この災厄の大海に呑みこまれ、消えてしまう。これは「あらゆる悲しみの張本人」と、アンミアヌスはアテナイの市民たちが塞ぎ込んでいるのを見て言った。しかし、その名に値するのは憂鬱症なのであり、憂鬱症こそ、人間の逆境の精華であり、精髓であり、その最たるものである。他の病気はすべて、憂鬱症に比べれば、蚤に咬まれたくらいのもので、憂鬱症こそが、あらゆる病気の髓なのである。

災厄の宿なのだ。それ以外に言いようがない。
悪しきものなら、なんでもそこに揃っている。

憂鬱症患者はまさに、コーカサス山に縛り付けられたプロメテウス、あるいは巨人ティテュオスであり、詩人たちが描くように、その腸は、つねに禿鷲に啄まれている。実際、ジーリオ・グレゴリオ・ジラルディはそのように解釈している。憂鬱症患者は不安と気苦労という禿鷲に苦しめられているのだから、この解釈は妥当だと言える。他の病気の場合、我々は助けを求める。たとえば不調や怪我で脚や腕が痛んだり、普通の病気に罹ったりした場合、我々は何にもかくにも助

けと健康を求め、なんらかの手段が確保できるのであれば、すぐさま治したいと願う。この場合、健康以外の富と財産は簡単に手放すことができ、どんな苦痛にも耐えることができるし、苦い水薬や不味い丸薬を飲むことも厭わず、関節に焼き鏝をあてられても、たとえ手足を切り落とされたとしても、未来の健康を思い、耐えることができる。この世において、何よりも愛おしく、大切に、かけがえのないものは、生命だからである。大抵の場合、我々が求めるものは、長い人生と幸せな日々である。「ユピテルよ、我に長寿を与えたまえ」。寿命が延びることを、人はみな願うのである。しかし、憂鬱症の人にしてみれば、長寿ほど退屈でつまわしいものはない。つまり、彼は普通の人が用心深く守ろうとするものを忌み嫌う——生命を忌み嫌うなど、憂鬱症患者くらいしかないが、それほど彼の苦しみは耐えがたいのである。「身体の病と魂の病とではどちらが辛いか」などと問う人がいるが、両者は比較にならないのであって、その答えは「身体の苦痛よりも、魂の苦痛の方が、ずっと激しく、はるかに辛い」（レメンス 1. 12）で間違いない。

——この場合、身体全体が傷つく。

憂鬱症においては、身体と魂がともにおかしくなるのだが、特に魂の症状がひどい。これについては、カルダーノが『事物の多様性について』（8. 40）で証言しているし、プルタルコスとプラトン主義者テュロスのマキシムスもこれを正しく証明する本を書いている。「時が経てば病は治る」というように、他の病気の場合は希望があるのだが、これら不幸な人々は、生まれながらにして惨めであり、回復の見込みはまったくない。これは不治の病であり、長生きすればするほど悪化するので、彼らに安らぎをもたらすのは死だけしかありえない。

自殺の是非については問題視する哲学者もいて、たとえ、このような苦痛と悲しみの極限状態にあっても、自殺することは許されるべきではなく、自殺者は非難されるべきだと論じる者もいる。プラトン主義者たちは、このようにやむなき場合においては許されるとして自殺を認め、「至福について」（7）におけるプロティノスも同様である。またプラトンの『パイドン』において、ソクラテス自身、自殺を弁護し、「不治の病に苦しむ場合は、自殺することでその人のためになるのであれば、自殺してもかまわない」と述べる。エピクロスとその弟子たち、そして犬儒派とストア派は、概して、自殺を肯定する。特にエピクテトスとセネカは自殺を容認し、「何であれ、自由へ至る道は正しい」とし、「我々は自分の意思に反して生きることを強制されていないことを、神に感謝すべきである」と言う。「人にとって何が門、牢獄、監禁たりうるか。人にはつねに自由への扉がある」、つまり死という自由の扉はいつでも開くことができるのである。「断崖絶壁や川や穴や木が「目に入れば」自由はいつでも手に入る。「悲惨や奴隷から抜け出す方法はある」。あの有名なスパルタの少年のように、「僕は奴隷にはならないと叫んで」、崖を飛び降り、自由になればいいのである。身体を巡る血管も、「とても辛い逃げ道ではあるが」、我々に自由を与えてくれる。「死を作り出すのと、受け入れるのとで、何の違いがあろう」。人は惨めな生活を強いら

れる必要はないのである。「強いられて生きるのはよくないが、強いられて生きる必要もない」(セネカ『書簡集』12. 10)。「意味なく死ぬのは無益だが、悲しみのうちに生きるのは愚かである」(同上 58. 36)。我らが母なる大地は、なぜ、これほどまでに大量の毒を排出するのか、とプリニウスは問い、それは人間が自殺することができるようにするためであると答えているが、事実、リウィウス曰く、太古から国王たちや、死刑執行人たちは「いついかなるときでも、すぐに使えるよう毒を所持」していた。ディオゲネス・ラエルティオスが出会ったとき、スペウシッポスは病のため、奴隷たちの肩に担がれていて、嘆きの言葉を漏らしたのだという。しかし、ラエルティオスは、あなたのことを可哀想だとは思わないと返答した。というのも、「あなたはそのような状態で生き続けていても」、いつでも、自分の意志で死を選択し、自由になれるのだから。それゆえ、セネカはカトーやデイドーやルクレティアなど、自ら進んで死を選択した人々の大きな勇気を褒め称える。彼らは、死よりも辛いことを避け、その苦痛から自由になることを選択したのだ。あるいは、クレオパトラやシュファクスの妻ソフォニスバ、あるいはハンニバルやユニウス・ブルトゥスのように、自分たちの名誉を守り、自分たちの正義を示したのである。また、リウィウス(6. 3)が記録するように、ウィビウス・ウィリウスとその仲間の元老院議員たちは、ローマの支配から逃れるために、服毒自殺した。テミストクレスは、祖国と戦うことになるくらいならと、雄牛の血を飲んで死んだし、デモステネスも服毒することを選んだ。小プブリウス・クラッスとケンソリヌスとブランクスなど英雄的なローマ人たちは、敵の手に落ちるのを潔しとせず、自殺した。この他にもあらゆる時代に、幾多の人々が、「罪もないのに、自刃の餌食になった」のだろうか。マカベア家のラジスは、自殺したことで称えられているし、サムソンの死も是認されている。サウル然り、ヨナの罪然り、またレンミキウス曰く、ローマ陥落の際、純潔と名誉を守るために自死した多くの人々は男性も女性も、「その記憶が天国で賞讃されている」というし、これに類することはアウグスティヌスの『神の国』(1. 16)にも記してある。ヒエロニムスもヨナの行為を弁護しているし、アンブロウシスも『処女性について』(3)で少女ベラギアの自殺を褒め称えている。エウセビウス(8. 15)は暴君マクセンティウスの情欲から自らの身を守るために自殺したローマのある夫人を称えているし、マームズベリの修道院長アルドヘルムは純潔のために自殺した女性たちを「祝福された乙女」と呼ぶ。キケロの友人として知られるティトゥス・ポンポニウス・アッティクスは、頭脳明晰で思慮深いローマ元老院議員であったのだが、長い間、病床に臥すことになったとき、自分の病気は治療不可能だと思い、「回復の見込みなく生きていても、苦痛が増す一方なので」、その苦痛を取り除くため、敢えて食事をとらず、自死することを決意した。アグリッパが自死の決意をしたとき、友人たちは涙を流して、自殺をしないように、つまり「自然が強いることを早めないように、口付けをしながら、嘆願した」。「アグリッパがもう一度、固い決意で自殺したい旨を告げると、友人たちは彼の意志を尊重し、やめさせようとはしなかった」。「アグリッパは無言の頑なさで、彼らの願いを押し殺し」、自殺した。元老院議員ではもうひとり、コレリウス・ルーフスも、小プリニウス(『書簡集』1. 12)の記述によると、食事をとらずに自殺したという。「痛風に罹ると、信じられない痛みと不当な苦しみに苛まれ、

食べ物を一切摂らなかった」。小プリニウスと彼の妻ヒスピラにも彼を止めることはできず、「死ぬことを強く決意して」、実際に、そのまま餓死した。他にもリュコルゴス、アリストテレス、ゼノン、クリュシッポス、エンペドクレスなど自殺した者は多い。戦争においては、差し迫った危険と目の前の死に果敢に立ち向かう行為は、豪胆で不屈な精神とみなされ、自分自身を犠牲にすることで、数千人もの敵を道連れにする行為、敵もろともに進んで自死する行為は、栄光ある行為であり、その者には勲章が与えられる。かつて、マサゲタイ人やデルビケ人などの部族は——他にもあっただろうが——、70歳を過ぎると、老人たちを窒息死させ、老齢に伴う苦しみから解放していたという。空気がきれい過ぎて過ごしやすく、長生きする人が多いコス島の住民たちも同様で、「病弱になり、痴呆が始まる前に、罌粟か毒人参を使って、定められた死の先回りをした」。トマス・モア卿は、その著『ユートピア』の中で、自発的な死を推奨する。病人が「自分自身、もしくは他人のお荷物になり（特に生きてることが苦痛である場合は）、自らの手で、あるいは他人の手を借りて、この牢獄のような退屈な人生から自由になってもらおう」。これは、かつてラエルティオスがゼノンについて語った主張、「激しい苦痛に苦しんでいた、手足を切断されたり、病が治らない場合、賢明な人が自殺するのは正しい」、と同じである。プラトン（『法律』9）も老齢や貧困や不名誉などに苦しむ場合、自殺を是とし、クインティリアヌスも事実上、そう表明する。「長く悲しむのは、自分の責任に他ならぬ」（『弁論家の教育』の序文7）。イエズス会士マッテオ・リッチによると、中国では自殺は珍しくなく、「人生に絶望し、悲惨な生活に苦しみ、うんざりすると、彼らは自殺するのだが、多くの場合、敵を嘲笑うべく、彼らの家の前で首を吊る」。歴史家タキトゥスと哲学者プルタルコスも、自発的な死に大いに賛同し、アウグスティヌス（『神の国』1.29）も、正当な理由があつてなされる自殺については弁護している。「死ぬことのない状態になれば、このように死ぬ者はいない。どんな死に方でこの世を去るかは問題とならない。人生を終えた者は、もう一度死ぬことを強いられることはないのだから」。誰しも自発的に死ぬことなどありえない。いやおうなく、人はいずれ死なねばならぬ存在である。我々の人生は数えきれないほどの死の危険に曝されており、いついかなるときに死が訪れるのかはわからない。だとしたら、「一度だけ我慢して死ぬのと、すべてを恐れて生きるのとではどちらがいいだろうか」。『集会の書』（30.17）にあるごとく、「死は辛い人生よりもまし」であり、一度死んで、すべてから解放されることを選ばず、恐れながら生きることを選ぶのは難しい。何百人の聴衆がいたのか、その数は定かではないが、哲学者アンブラキアのクレオプロトスは、この世の悲惨さとあの世の素晴らしさについて優れた演説を行い、人々を身投げさせた。そして、彼自身、プラトンの『パイドン』における魂についての神聖な論攷を読み、例を示すため、自らが一番に飛び込んだという。カリマコスの巧みな警句にもこう書かれている。

アンブラキアの賢者は太陽に別れを告げると、
 三途の川に身を投げた。
 死ぬ理由などなかった。たまたま彼は神聖なる

プラトンの優れた自殺論を読んでいたのだ。

かつて、カレヌスと彼のインド人たちは、老衰で死ぬことを嫌っていたという。またキルクムケリオネス、すなわち後のドナトゥス派の人々は、人生を嫌い、他人に無理やり、自分たちを殺させたというが、これと似た例はたくさんある。しかしながら、これらは異教徒たちの誤った見解、ストア派の卑俗な逆説、邪な例にすぎず、この種のことで、異教の哲学者たちが何を言おうと役には立たない。彼らは、そもそも立脚点が間違っており、不敬で忌まわしい。「いかなる悪もなされてはならない。たとえその結果が善だとしても」と主は言われ、聖書も神もそう告げる。そして、善良な人はみな、自殺に反対する。他人を刺す者は、相手の身体を殺すのに対し、自らを刺す者は、自分自身の魂を殺すのである。喜劇作家プラウトゥスが言うように、「乞食に食べ物を与えるのはよくない。施し物はすぐに無くなり、乞食の人生はさらに惨めになるのだから」。ラクタンティウスは、自殺擁護を忌まわしい見解とし（『真の修養』6.7）、完全に論破する（『神学綱要』3巻「英知について」18）。アウグスティヌス（『書簡集』52「マケドニア人宛」、61「部族長宛」）とヒエロニムスも同様で、後者はマルケッラに宛てた書簡でプレシッラの自死について、「私はそのような魂は受け入れない」と述べ、自殺者のことを、「愚かな哲学の殉教者たち」と呼ぶ。キプリアヌス（『幸運への二つの殉教』）も同様に「自殺者は、病気か虚栄心か狂気に駆り立てられたのである」と述べる。自殺するのは単なる狂気であり、「死にたくないから死ぬのというのは狂っている」。これについては、アリストテレス（『ニコマコス倫理学』3）とリップス（『ストア派哲学指南』3.23）にも同様のことが書かれており、反証する必要もないのだが、ただ以下のことだけは付記しておきたい。自殺をしたり、自暴自棄の発作に駆られて、他人を刺したり切りつけて殺したりする人々は厳しく非難されることがあるが、こういった人々が、狂気ゆえにしばし心身喪失状態にある場合、あるいは、長きにわたって憂鬱症であったことが判明した場合、もしくは、憂鬱症がひどくて理性と悟性などすべてを失い自分が何をしているのかさえ分かっていない場合、彼らに向ける非難を軽減すべきだということである。というのも、彼らは水先案内人のいない船同様、岩礁や砂洲にぶつかり、難破してしまうのが必然だからである。フォレーストが例としてあげる憂鬱症になった二人の兄弟は、最期は自殺してしまうのだが、そのために激しく非難され、自殺者相応、不名誉に埋葬された。これは、かつてミレトスの乙女たちを恐れさせたのと同様、人々の戒めとするための埋葬であったのだが、のちに二人の惨状と狂気が調査されると、彼らに向けられた非難は取り下げられ、恭しく埋葬され直したのだという。ちょうど、サウルの遺体がダヴィデによって埋葬し直されたときのように（『サムエル後書』2.4）。そしてセネカは「自殺者は殺人者として非難されるべきであるが、死者として憐れむべきである」と忠告する。それゆえ、彼らの財産と遺体については、我々が処分しても構わないだろう。しかし、彼らの魂がどうなるかについては、神のみぞ知ることなのである。神の慈悲は、「橋と川の間、剣と喉の間」に訪れるかもしれない。「ある人に起こったことは、誰にでも起こりうる」。その人がどんな誘惑を受けているのかは、誰にも知りようがない。確かにこれは他人事かもしれないが、

あなたの身にもふりかかるかもしれない。「今日は他人事でも、明日にはわが身かもしれない」。非難をするとき、性急に判断し厳しく行う者がいるが、我々はそれを避けるべきである。慈愛の心こそが、最良の判断をし、最良の希望を告げる。神よ、我らすべてを憐れみたまえ。

*太字表記は原文がラテン語であることを示す。

テキスト

(底本) Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy (Oxford English Text)* (6 Vols.).

Ed. by T. C. Faulkner, N. Kiessling and R. L. Blair. Oxford: Clarendon Press, 1989-2000.

(参考) Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy (Facsimile) (The English Experience)*. Amsterdam: Theatrum Orbis Terrarum, 1971.

Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy, What It Is, with All the Kinds, Causes, Symptomes, Prognostickes & Severall Cures of It*. Ed. with an Introduction by Holbrook Jackson. New York: Vintage Books, 1977.

Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy: now for the first time with translation and embodied in an All-English text*. Ed. and trans. by R. Jordan-Smith and F. Dell. London: Routledge, 1931.

既訳

- | | | |
|---------------------------------------|--------------------|--------------|
| 「第1部 第1章 第1節」 | 『京都府立大学学術報告 人文・社会』 | 第59号 2007 所収 |
| 「第1部 第1章 第2、3節」 | 『京都府立大学学術報告 人文・社会』 | 第60号 2008 所収 |
| 「第1部 第2章 第1節」 | 『京都府立大学学術報告 人文』 | 第61号 2009 所収 |
| 「第1部 第2章 第2節」 | 『京都府立大学学術報告 人文』 | 第62号 2010 所収 |
| 「第1部 第2章 第3節 第1-10項」 | 『京都府立大学学術報告 人文』 | 第63号 2011 所収 |
| 「第1部 第2章 第3節 第11-14項」 | 『京都府立大学学術報告 人文』 | 第64号 2012 所収 |
| 「第1部 第2章 第3節 第15節」 | 『京都府立大学学術報告 人文』 | 第65号 2013 所収 |
| 「第1部 第2章 第4節 第1-6項」 | 『京都府立大学学術報告 人文』 | 第66号 2014 所収 |
| 「第1部 第2章 第4節 第7項 - 第5節、第3章 第1節 第1・2項」 | 『京都府立大学学術報告 人文』 | 第67号 2015 所収 |

(2016年10月3日受理)

(おかむら まきこ 文学部 共同研究員)

(かわしま のぶひろ 龍谷大学 准教授)